

---

# 野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

inisie

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野口君観察日記。 題名は変え・・・るのかな？。

### 【Nコード】

N9645X

### 【作者名】

inissie

### 【あらすじ】

野口君は主人公ではありません。観察対象です。ペットです。異世界ものです。

そんな所です。ヒロインが走り回る不思議なお話です。

では皆様私の日記をご覧ください。

1話・副題を考えるのがめんどくさい。(前書き)

第一話というより零話に近いです。  
登場人物の自己紹介のお話ですね。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。

夢を見た

幼馴染を刺し殺す夢を見た

胸から血が飛び出し顔にかかる

「わりい」

「いや、いいよ」

それだけで十分だった。

・・・なんだ今日の夢は

どこの厨二病だ！と叫びたくなる衝動を抑えベットから起きカーテンを開く。

陽射しが眩しい、今日は晴天のようだな。

ああ、いい朝だ、あんな血生臭い夢を見たとは思えない。

顔を時計へ向ける。

・・・ああ、いい朝だ・・・時計が9時という始業時刻を過ぎていなければ！

学校へ到着し先生に報告し今月10回目の遅刻ということので、少々の説教を受け教室へ行く。

ふう、と一息、そこに声をかけられた。

幼馴染の野口君じゃないか。

「よう、おはよう？」

何故に疑問系といったところで時計を見る10時を過ぎていた。

疑問系も納得だ。

「今月何回目の遅刻だ？2桁のつたか？」

おお良く分かった、野口君は私の遅刻の回数まで暇だからといって数えているのか。

ストーカーなのか？おお怖い怖い。

「馬鹿やろう！心配してる幼馴染になんて態度だよ。まあ遅刻も程ほどにしとけよ？」

分かっている。確か150回遅刻すると1ヶ月分の欠席と同じだから、ほぼ進学は出来ないだろう？推薦ももらえなくなりそうだ。

「そういう事を言ってるじゃねーけどなあ・・・まあそこらへんはお前は分かってやってんだろうからいいんだがな」

二人で手を繋ぎながら教室へ行く。

「何故手をつなく！いやいやいやいや離せ！このまま教室に行ったら玄関口まで迎えにいった変な奴だと思われるだろ！生徒会長の俺を変人に仕立て上げる気か！」

うるさいと一蹴。元々君は変人だ。これ以上に変人になれるわけがない。むしろ変人に失礼だ。変人に土下座をしる。

「・・・」

口をぱくぱくさせている。ふむ面白い顔だ。魚の真似か。私もしてみよう、ぱくぱく

「お前・・・後で覚えてるよ・・・」

覚えておくわけが無い。そこまで遊んだ所で手を離し先に行く野口君。

ああ説明がまだだったな自己紹介だ。

18歳 185cm 体重75kg 髪は黒のショート ツンツン

頭だな。

学力テスト校内1位

スポーツにおいては陸上で県大会3位

囲碁部においては団体戦県2位

全国弁論大会においては理事長賞だったかな？

顔はまあまあ整ってる異性にはそこそこもてるだろう

それでいて生徒会長をやっているという！

なんとも忙しい野口のぐち 克也君かつや！

私にはまったく真似できないよと頷いていると教室に到着した。  
何故か身震いした。どこぞの見えない世界からツツコミが来た気がした。

気のせいだろう。うん気のせいだろう。

教室のドアを開く。皆の目が私に向く友人達に挨拶をし自分の席につく。

そこへもう一人の幼馴染の顔があった。

「おはよう？今日はどうしたの？」

寝坊した。絢子さん今日も可愛いね。絶世の美女のようだね。きつと絢子さんを見たら卑弥呼だろうとクレオパトラだろうとベアトリ―チエだろうと逃げ出すだろうね。

「ありがとう？けど3大美人をあげるんだったら卑弥呼じゃなくて楊貴妃だし、もう一人はちよつと良く分らないよ？」

なんと！卑弥呼ではなかったのか。まあなんでもいいじゃないか。

ああ後もう一人は絢子さんは一生関わらないで欲しいジャンルかな。気にしないで。

と、チャイムがなる。

「あつ後でゆっくりお話ししようねー。」

若干間延びた声で去って行く絢子さん。さて後で授業の準備だ。あれ？鞆の中身が昨日のままだった。まあいいか。どうせ私は学校にいる間ほぼ、一つの科目しか勉強しないのだから。

さてここで自己紹介といこうか

校内美少女ランキング3位

もうここで分かったと思うけれども小林こばやし 絢子あやこさんのことだ。

眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツでも体育程度にならソツなくこなし、誰にでも優しい。と3

拍子どころか4拍子揃ってしまった日本3大美女の一人だろう。

身長は160cmぐらい？ 体重は45kg、48kgぐらいだろう。

髪はロングの金髪な訳はなくショートの薄茶色といったところか。

そろそろこれは自己紹介ではなく、他人紹介と言った方がいいのだから。

2時限目の授業が始まる。数学のようだ。ふむふむ今日は小テストか。

15分で終わらせる。さて野口君のほうはと、前を見てみる、寝てる。生徒会長さん。やっぱり貴方は変人です。先生の目の前の席で寝れるその度胸。私にはとても真似出来ません。

先生の苦笑した顔を見てみなさい。

生徒会長で学年一位それに加えて普段は品行方正な貴方がテストが終わったといって寝てても注意できないでしょうが。

しょうがないですね、ここは私が一肌脱いであげますね。先生、後でパンを奢ってくれてもいいんですよ？

ガタツと席を立つ。先生にテストを手渡す。周りを見回す。全員がこちらを見てる。

ニヤニヤしてる人と頭に？をつけている人の二通りかな。

野口君に近づくと、髪がささりそうだ。バリカンを持ってきてこの草畑を刈ってやるのか。

と耳元にふうーと息を吹きかける。

ガバツと起き上がる。

「な、な、なにしよ」

某野球漫画のように言う カッチャン！南を甲子園につれてって！



「誰がカツちゃんか！南！この野郎！」  
教室内は大爆笑の渦につつまれた。

さて、ここで自己紹介をしよう。

久坂くさか南私みなみの名前だ。

身長は155cm 体重は40kgぐらいなはずだ。最近計ってないからなんとも言えないが。

髪は漆黒といって良いほどの黒 長さは腰元ぐらいまではあるだろう。

スポーツは普通 クラスで浮く程下手でもなく

ピアノが少し出来る。

勉強に関してはそこそこの学年で30番目ぐらいといったところか？  
趣味は人間観察というか野口君観察。

部活は囲碁部の部長をしている！部員3名だ！

絢子さん程ではないがそこそこの顔は整っていると思う。  
あえて言うなら釣り目がちなのが傷といったところか？

私の特徴を言うならばそんな所だろうか？

1話・副題を考えるのがめんどくさい。(後書き)

この度は見て頂きありがとうございます。  
第2話でお会いしましょう。

## 2話・異世界ものじゃなくて学園物？（前書き）

第2話です。

学校パート終了です。

さて、勝手に動いていくキャラクター達に翻弄されながら頑張っていると思います。

## 2話・異世界ものじゃなくて学園物？

ふむ、2時限目の数学が平和に終わった。

野口君を見てみると机に顔を乗せて寝た振りをしているようだ。この後のことを考えると憂鬱なのだろう。分かる。今の私がそうだ。

「ねえねえ！野口君とはどういう関係なの！？」

クラスの女生徒が3人、私の机の前に立っている。

ああこの子達は初めて私達と同じクラスになった子か。

他にも何人かこちらを窺っているな。

彼氏だよと一言。将来を誓いあっているんだ。

歓声が巻き起こる。

「南！てめえ何いってやがる！ただの幼馴染だろうが！」

野口君寝たふりは終わったのかい？

幼馴染だね。学校が一緒になったのは高校生からだ。

「あーあー学校が一緒じゃないのに幼馴染なのは学区が違うからだ。南の家と俺の家隣なんだが道路を隔てて中学と小学の学区が違うんだ。」

その通り歩いて3分もかからないのにも関わらず学校が違う。まあ私達の愛の前ではそんな道路なぞ障害にもならないがな。

「うるせえ！俺が彼女居ないのは99%お前のせいだからな！」

「けど、二人共高校では一緒なんだね。一緒にいたいから高校一緒にしたの？」

ぴくっと野口君が反応する。その反応は微妙だね。きちんと反論し

ないとまた誤解を招くよ野口君。

そうなんだ。私がこの高校を選んだら野口君と一緒に居たいと言いだしてね。

私としては断る理由がまったくないから了解したのだが。

「嘘をつけ！嘘を！近くの高校選んだらお前がいて、理由を聞いたらまったく一緒だったじゃねえか！」

そうなんだ。本当は色恋沙汰はまったくないんだ。けれども野口君は私を愛してくれているんだ。少し前から廃れてきてるツンデレというやつかな。困った困った。

「……」  
また口をぱくぱくとさせている。

野口君は魚の真似が得意なんだね。私も真似をしよう。ぱくぱく

「もういい…疲れた。」

まあそんな関係なんだ。ご理解出来たかな？婦女子諸君。

「う、うん分かった。野口君…頑張つてね！応援してるよ！」  
何をだろつとツッコミたくはなつたが応援してくれているよ野口君。

3時限目の科学が始まる。

そこで絢子さんのほうを向く。ぷくーとふくれた後、ため息をしているのが見えた。

うん。とても可愛いよ絢子さん。どこをどう見ても絶世の美女だ。

よそ見をしていると先生が入ってくる。部活の顧問だ。

「久坂…今日は遅刻してないか？」

名指しでのご指名。はいしていません。科学には間に合いました。

「それは遅刻したっていうんだ。はあ…もう少し遅刻は無くせ。」

もう少し心労を減らしてあげたほうがいいだろう。今年で定年退職というのに私という問題児を抱えていては休むに休めないのだろう。さて科学に関しては、あまり問題ないので先ほどの夢に関して考えていこう。

まず、私には予知夢と言われる能力がある。範囲としては、かなり限定されている。私の身の周りに起こる事に加え寝ている間の夢だけではなく、突然眩暈がして数分後の光景が頭に思い浮かぶというパターンもある。

今回は前者のようだ。

まあ・・・予知夢程大げさではないか。外れる場合もあるのだから突拍子も無い場合は100%今の所外れている。後、私が関わっていないことを見た場合も100%だな。例えばだがクラスメイト全員がゾンビになる夢や、野口君に彼女が出来たとかだな。だが私自身が夢に出て、かつハッキリ覚えている。喋った言葉まで覚えている。この場合は当たる可能性がかなり高い。

では、何故私が野口君を刺す夢を見たのか。あまりにも突拍子も無い夢は当たらないのか。けれども、もしかしたら本当に野口君を刺してしまう場面でもあるというのか。

…ありえないな。野口君は変人だが品行方正であり、悪事というのを働く場面が想像つかない。

ん？私が野口君をあまりに嫌いになって刺す可能性か？

ありえないな。私が嫌いになったら刺すだけでは済まないだろう。

前後の会話も気になる所だが、思い出せるのは野口君が謝罪をし、私はその謝罪を受け取っている。その場面しか夢の記憶がない。

ふむ…まあいいだろう。もし正夢なのならば逆夢にしてしまえばいいのだから。

キスでもすれば大丈夫だろう。

…ん？野口君の様子が変だな。頭がふらふらしてる。眠いのか？先程のアレでは目が覚めなかったのか？

いや、おかしい10年以上野口君を見てきた私だから言えるあの様子はおかしい。

倒れてもおかしくなさそうだな。すぐに動けるように…

…背中が光った？いや…野口君が光ってるように見…私は走り出した。

間に合ってくれ。

野口君が消えそうだ。

体の半分が消えている。

指が消えるその一瞬。

私の中指が引つ掛かった。

ふう… 一体君は何度面白い場面を見せてくれるのかな。

金色に輝きだしたときは某サイヤ人にでもなるのかと思ったよ。

薄れる思考の中で、そんな事を考えていた。



## 2話・異世界ものじゃなくて学園物？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

最後まで読んでなくてもクリックしてくれてありがとうございます。

とりあえず2話終了です。

3話目からは異世界編ですね。

どうなるかは予想がつきません。

キャラクターが勝手に続きをやってくれるでしょう。

ではまた。

3話・異世界もの。(前書き)

本番開始。

### 3話：異世界もの。

ん・・・硬い・・・床で寝てるぐらいに硬い。

朝が弱い私がこんなにすつきりと起きれるのは珍しい。

・・・喉が渴いたな。

起きて水を飲みにいこう。

そう思った瞬間ハツとする。

野口君はどうした？

周りを見渡す、どこにもいない。

・・・ここはどこだ。森の中のようだが手入れがされている。

森の中の広場といったところか。

ここまで綺麗に円形に広場を作る公園でもあるのか。

ガサッ

音がした。

野口君か？それとも他の人か？

警戒度を上げ音のした方向を見る。

そこから出てきたのは金色の髪をした見た目20歳前後のお兄さんだ。

「君は誰だ？」と日本語で話しかけてきた。

言葉は通じるようで安心した。ここは日本のどこかのようだ。

私は自己紹介と友人を探していることを説明した。

「君のような黒髪で短髪で身長は私より少し高いと」  
考えてる素振りが似合う人だと思った。

「ああ申し訳ない。淑女の前で自己紹介もしないとは失礼した。  
私の名前はエル・シユタイン この家を警備しているんだ。」

警備員？警備員がいる家とは・・・ここは公園ではなく家の一角なの  
か。

「ああ、こんな所で話すのも失礼だな。本宅へは連れていけないが  
私達が寝泊りする所へ案内しよう。」

そこなら座れる所も飲み物も用意できる。」  
すごく嬉しかった。喉が渴いていたから水をもらえると嬉しい

警備員の詰め所へ向かう途中

「珍しいね」と一言  
なにがですか？と聞き返すと

「その髪の色だよ。私は23年間生きてきて髪が黒い人間は初めて  
みた。どこか遠い国の人なのかい？」

・・・その言葉が本当だとしたら、ここは日本ではないことが確定  
する。

もしかしたら言葉のアヤで私みたいな綺麗な黒髪の人は見た時がな  
いというナンパの台詞なのだろうか？・・・ないかな。  
曖昧な返事を返しておく。

応接室というかソファーム室のような部屋へ通された。

「飲み物は何かいい？」

水かコーヒーがいいです。

「すまん。コーヒーとはなんだ？」

・・・水を下さい。

コーヒーを知らない世界・・・あり得るの・・・？自分の中で自問自答を繰り返す。

もしかしたら、ここは未開の秘境みたいな所なのか・・・？

「ミナミ・・・ミナミ！」

ハツとした呼ばれていたようだ。

「ミナミはこれからどうするんだい？1日ぐらいならここに泊めてあげないこともないけれど。友達を探すなら一番近くの町まで送っていくよ？」

私の中で警報が鳴っている。

一番近くの街までどれぐらいかかるのか聞いた

「2日はかかるかな？それがどうしたんだい？」

・・・99%確定した。ここは日本ではなく地球ではない可能性が高い。

もし地球だったとしたら孤島のと真ん中か、アフリカ等の奥地に近いだろう。

けれども、こんな大きなお屋敷がサバナナ等のと真ん中に立っている訳がないから後者は却下。

前者の可能性を信じて、移動方法を聞いてみる。

「馬を使うつもりだよ？ミナミは乗れるかい？」

これで島という線もほぼ消えた。

・・・野口君・・・君はどこまで特別なんだい？  
それが良い所なんだけれどもね。

「ああミナミ。僕は主の所へ報告へ行ってくる。君の事も少し話をしなければいけないだろうから時間がかかりそうだ。ここでゆっくりとしているといいよ。」

と、言い席を立つエルさん。

ちようどいいな、私も考えを纏めたい所だ。

さてここは、私がいた世界ではない可能性が高い。

第一に野口君に触れた後、私は庭という名の広場で寝ていた。

第二に移動方法が馬。これはない。どんな遊牧民なのだろうか。

もしかしたらモンゴル等では？という可能性もなくはないが、どうみてもエルという人はアジア系ではない。

まず、私は何をすればいい？

野口君を捜す。日本に帰る。この二つが最たるもの。

お金はどうするか・・・胸ポケットにいれた10000円のみ。

持ち物。鞆は無し。ボールペンが1本。電池が3本の圏外の携帯電話。

服は制服。スカート。ブレザー。ブレザーの下に着た黒のセーター。

・・・詰んでるような気がする。

野口君・・・恨みたくなるよ・・・絢子さんはどうしてるかな。

あの笑顔が見られないのは私の精神的疲労度が20%増しになりそうだ。

まあ悲観的に考えてもしょうがない。こういう異世界の小説とかではいきなり山賊やら盗賊とかに会って奴隷になるとかもある。そう考えたなら私はましなほう・・・とか思えるわけないだろう！

絶対見つけて、抱きしめて引っぱたいてやる・・・。  
報酬は君の体だ、野口君。  
精々体を洗って待つていてくれたまえ。

・・・おかしいな。あれから2時間がたった。説明に時間がかかっているのか？

クラツと私の体がぶれた。

眩暈か久々だな。

私が縛られている姿が見えた。

・・・野口君は緊縛の趣味でも出来たのか・・・と思いたいがまず違うだろう。

私は動揺でもしていたのか。どんなにみんなに落ち着いていると言われていても私も人間だからな。

おかしい点があったな、何故エルはあれだけ親切なのだ。

私にそれだけのメリットがあるか？いや、ないな。まったくの初対面の人間をここまで歓待してくれる。話を聞いてくれるのは有り難いが、ここが私の居た日本とは違うという事を踏まえるとあり得ないな。

・・・ここから出た方がいいか。それともエルは本当に親切で初めて会った人にも関わらず助けてくれるのか。

後者だった場合は有り難く街まで送ってもらおう。けれども前者だ

った場合と先程の眩暈。  
どうするか。

・・・野口君。君ならどうする？皆を引っ張って来た君なら・・・



### 3話・異世界もの。(後書き)

第3話の終了。異世界編開始です。

次からは野口君探しの旅へ。いけるのか・・・？

4話：他人のフラゲプレイカ（前書き）

異世界編第2話。

#### 4話：他人のフラグプレイカ

野口君・・・君ならどうするかな？

・・・いや、君は頭はいいが単純な所があるからな。

私が小学生の時からいつも抑えてきたじゃないか。

なら、いつもの私でいこう。

さて、どこから逃げるべきか。

取りあえず、ドアからか。誰がいるか？いると予想するべきだろう。保留。

窓、開くがこれは無理だな。私がスレンダーとは言え空気窓から出るのは無理だろう。胸か肩が引つ掛かるだろう。野口君が聞いたら引つ掛かる程ミナミに胸はねーよとか言われそうだな。フッフ。

壁、無理だな。私には念を使うことはできないから壁を壊すのは不可能だな。

上、壁があるだけか。

ん？照明がない？照明は横壁に掛っているのか、照明をしてみる。

外せるようだな。ただの球体？電池はどこから入れるのだろう？まあ貰っておこう。鞆が欲しい所だな。

とりあえずドアでいこう。どうやって外に出るかな。

内側からノックをする。誰かいたら返事をするだろう。

「あーどうしましたか？」返事があった。

ふむ、お手洗いにいきたいと伝える。

驚いた。緑の髪だ。ピッコロさんもびっくりだな。

お手洗いに案内される。こちらを振り向いた瞬間、腕を振り抜いた。

ふむ。綺麗に頸にはいったようで安心した。

1時間は起きないだろう。出来れば護身用のものが欲しいのだが、ナイフが入ったポーチがあるな。

ここにライトを入れて腰につけておこう。

慎重に外に出る。移動手段が欲しい所だな。後できればスカート以外の服が欲しい。

取りあえずスカートは折つてある部分を伸ばしておこう。

野口君が居ないのならばミニの意味はないだろう。

警備の詰め所という割りには人数がいなかったな。本宅と庭の警備中といったところか。

取りあえず街道方向へ向かおう。

・・・ふむ土の地面。明らかにタイヤではない車輪のものがまっすぐ向かつてるな。

街はこちらか。馬で2日となると大きな街へは4日はかかるとみていいな。

途中に小さな村があることを祈ろう。

街道沿いの森の中を歩く。これは・・・きついな。多分だが追手は居る可能性がある。そのまま街道を歩く気にはならない。

水が欲しい所だ。飲み物か食べ物をそろそろ手に入れないとな。火

があれば草木は食べれるものがありそうだが。ライターはないし。FFやDQよろしく手をかざして呪文を唱えれば火が出ればありがたいのだがな。

目の前が炎上した。驚いた。これはどうした事か。メラやファイヤというのは存在したのか。

この世界はあり得ないな。だから異世界か。MPはどこに表示されるんだ。

まあいい。なんでもいい。火を手に入れたのだから。

半日ばかり歩いた所に、小さな村が街道沿いにあった。

さすがに私もカロリー補給がしたい。どんなに低コストで動く私の体でも1日食べないで歩き通すのは無理だ。それに会話がしたい。野口君をいじりたい。ふむ、野口君は私にとって必要な栄養素だったのかもしれない。それに気づけただけでもこの1日は有意義だっただろう。

村の様子を見る。人が数人・・・外を歩いているな。強盗は出来ればしたくないのだが・・・最悪背に腹は変えられないか。

・・・私は今、村で食事をしている。

「お嬢ちゃん！すごいな！どれだけ食べるんだ。」  
「すごい大きな声で笑ってる。少し恥ずかしいな。お腹が空いていたとはいえ食べ過ぎたか。」

この人は村の宿屋を経営しているサースさんというらしい。

「いや、さつきは助かったよ。あいつは村の作物を潰す、柵は壊すと来るたびに村が荒らされてな。」  
「ごめんなさい、私も作物を奪おうとしていました。」

「さつきのは、なんだったんだい？掌から火の玉が飛び出してきてたが？」

私の国の国民的英雄の勇者から教えてもらったんです。

「あつはつは！そりゃいいな。うちの国だけではなくて、他の国にも勇者がいるのか。」

数十分前・・・

私は村の脇で様子を窺っていたところ、2mはあろう猪が村の畑に突進してきていた。

見ているだけにしようと思ったのだが、村人達が鍬を構えて立っている所を見ると害を与えるものと分かり、その時には火を出していたのだ。

1回でその猪は燃え上がり、そのまま横に倒れてしまった。

これは、この魔法は強いのだろうか？それとも猪が弱いのだろうか？判別しかねるところではある。

ん？先程の会話に変な所がなかった？勇者？本当に存在するのかそんな人間が。

「今回の勇者は強いみたいだぜ。大柄で髪の色はお嬢ちゃんみたいな黒髪、大柄な割に足が速くてモンスターなんかじゃ速さでついていけないみたいだな。」

・・・なんだろう。その人物にはすごい心当たりがあるのだけでも、そのような特徴なら他にも多くいるだろう？

というかモンスターがいるんですか。本当にDQとかFFの世界観ですね。

私はあまりゲームをしないんですけれども、分かりやすくて助かります。

「ああ確か、ここに配布された紙があったな。国から配布されたやつ。母ちゃんー！どこへやったっけー？」

そこには、こう書いてあった。

新しい勇者が我が国。イスターナ皇国に誕生した。

名は カツヤ ノグチ

足が速く、頭も良く、魔法も使える。

我が国は、これよりモンスターを退治し、この国に永遠の平和をもたらそう！

とまあ長々と書いてあったのを略すと、こんな感じ。

・・・野口君、君は本当に本当に面白いですね。

段々と最初に見た夢の内容が本当になっていくようですよ。

大局には逆らえないのでしょうか・・・？

いや、愛の前には神様だろうと神龍だろうと、全て、何も関係ないですよ。

私は野口君を抱きしめて、殴って日本に連れ帰るだけです。

楽しみです。私がこんな苦勞をしている中、貴方はどんどんフラグを立てていそうです。

私がいる限り、そのフラグをバキバキにたたき折って差し上げましょう。



4話・他人のフラゲプレイカ (後書き)

第4話終了。

5話…回想といつかの妄想。(前書き)

ん・・・？

前書き？

いらないうでしよっ？

いる？

・・・よろしく願います。

## 5話・回想という名の妄想。

ふう・・・と一息。

夜になったな。1日で色々なことが起きすぎだ。

野口君に触ったら異世界らしき所へ。

起きたら人の家の庭で寝てて。

その家の警備員を殴って。

逃げ出して。

村へ行く途中に火を出して。

猪を倒して。

今は、体を拭いていると。

どうして、こうなったんだ。

普段ならば、野口君の事を考えながら、1時間はお風呂に入っている時間か。

浴槽とは言わないでも、せめてシャワーが欲しい所だ。

まあ体が洗えるだけでも良しとするべきか・・・。

野口君と出会う前の私なら、こんなに長くお風呂には入らなかったのだがな。

髪を布で拭っていると、思い出す。

小学生のときのことを、あの時の私は髪は短かったな。

男子に負けず劣らずの喧嘩をして、口では負けた時はなかったな。

フッフ。

野口君もそういえば、いつも私に口で負けて泣きそうになっていたな。

あの頃は可愛かった。ああ違った。今も可愛いな。

「おい、久坂！」

呼ばれて振り向く。昨日、あれだけ負けさせておいてまた来たのか。「今日はかけっこで勝負だ！」

ふむ、良いだろう。ここからその木まででどうだい？

「久坂。今日こそお前を負けす！泣くまで負けさせてやる！」  
良いだろういつでもいいぞ。

「ドン！」

二人で走り出す。トップスピードにのった。今日は負ける気がしない。

ゴールだね。野口君。今日も私の勝ちのようだよ？君は何度負ければ気がすむんだい？さて、私は宿題をするから家に帰るね。

「ぐぐぐ……じゃあ宿題をどっちが先に終わらせるか勝負だ！」  
良いだろう。じゃあ私の家へいこうか。

「分かった。ランドセル置いたらそっちへ行く。」

お母さん。今日も野口君が来るから来たら私の部屋へ通して。

「ふふ、今日もなの？。仲がいいのね。ジュース用意しておくから来たらもっていくわね。」

「ただいま！」

ここは君の家ではないのだがな。それにしても大きな声だ。

「久坂ー！今日は俺のほうは算数のドリルだ！」

私のほうは漢字の書き取りだな。

じゃあ始めようか。

二人で黙々と宿題を進める。二人共無言だ。

「うーん……。あ……。えーっと。」

うるさい。無言ではなかった。野口君、君は喋らないと勉強ができないのかい？

「いいじゃねーか！これぐらい喋った内にはいらなひだろ？……ん？」

終わりだね。私は終わったよ。

「……。くそつ。また負けかよ！」

いいじゃないか。算数なら私が見てあげれるよ？隣に座ってもいいかい？

「あ、ああ……。いいけど……。」

ん？どうしたんだい？

「なんでもねーよ！」

うるさい。

「……。」

無言になった。

「うーん……。」

ここはだね。この式を使ってだね。

その時、ノックがした。

お母さんが、カフェオレとオレンジジュースだね。

いつも通りだ。

「少し休憩したらどう？ずっと勉強するのも体の毒よ。」

そうだね。お母さん。

野口君、少し休憩にしよう。

カフェオレを私の前にオレンジジュースを野口君の前に。

「久坂ーなん・・・」

南だ、野口君。

「み・・・、それ名前だろ？」

ああそうだね。名前で呼んで欲しいんだ。

「嫌だね。まあ俺が勝負に勝ったら呼んでやってもいいかな。俺とお前はライバルだろ？そういうものは名前で呼び合わないんだよ！そうなのか。なら仕方ないか。では一生私は名前を呼ばれないな。」

「なんで俺が一生負けてる前提なんだよ！！見てろよ！絶対にお前を負かしてやる！」

それはいいのだが、さっきは何を言おうとしたんだい？

「ああ・・・久坂は、なんでカフェオレなんて苦いの飲んでんだ？美味しいのか？それとも大人ぶってるのか！？」

うるさい。

ああ無言になられては困る。美味しいよ。カフェオレはそんなに苦くないからね。飲んでみるかい？

「・・・う、ん・・・分かった飲む。」

なんで野口君は、そんなに顔が赤くなっているのかな？

「うるせえ！赤くなんてねえよ！」

うるさい。

「・・・」

飲んでいるようだ。

「にげえ！超にげえ！ウルトラにげえ！！」

うるさい。

「・・・」

「・・・こんな苦いもの良く飲めるな。よしっ！俺も飲めるようにする！おばさーん！俺も今度からかふえおれをいれてくれー！」

「良いわよ。けど無理しないでね。」

笑顔で話すお母さん。

雨が降る日だった。

お母さんのお葬式だった。

「トラックに挟まれたんだってね。ほとんど見る影もなかった」

「しっ。子供の近くですよ。」

「あっごめんなさい。」

そんな声が聞こえてきた。

私は黒い服を着ていた。お父さんは忙しそうだった。

庭にいこう。少し落ち着こう。

野口君が雨が降る庭に立っていた。泣いていたようだ。

「ぐすつ・・・あ・・・久坂。」

きずいたようだ。目が赤い。

やあ野口君、今日は来てくれてありがとう。

お母さんも野口君の事が好きだったからね。

「あ、ああ久坂は落ち着いているんだな。もっと・・・」

そうだね。動揺はしてると思うけど、思ったよりは・・・といった所かな。

「・・・なあ久坂。」

なんだい？

抱きしめられた。なんでだろう・・・？

「・・・南。落ち着いた振りだろ？俺達これでも5年も一緒にいるんだぜ？」

名前では呼ばないんじゃないかなかったのかい？ライバルはなんとやらじやなかったのかい？

「お前も良くそんなの覚えてるな。」

笑っている。なんだか悲しそうな笑顔だった。

「南・・・俺、頑張るよ。」

何をだい？

「なんでもだ。」

そうか。

「ああ・・・南が頼れるぐらいの人になるよ。」

ああ・・・分かった。

その日は庭の見える部屋で野口君の膝枕で寝てしまったようだ。

・・・その時からだったかな。髪を伸ばし出したのは、7年か。伸びる訳だ。

腰まで伸ばすつもりは無かったのだがな。

野口君。君は今何をしているのかな。私が頼れる人なんだろう？  
私がそつちに行くまでにある程度は終わらせておいてくれると助かるよ。

窓の外を見ながらそんな事を思ってしまった。



5話・回想といじり名の妄想。(後書き)

第5話終了。

小学生時の回想。

6話・緊縛？なにそれ美味しいの？（前書き）

猫耳にゃーん。

## 6話：緊縛？なにそれ美味しいの？

目が覚めた。まだ暗い。

何故だ。私はこんなに早く起きる習慣は無い。

遅刻の常習犯の私が何故こんなに早くに起きなければならない。

音がする。

ガタンガタンと、宿屋の下の階から大きな物音がする。

なんだろう？と目を擦りながらドアを開ける。

「お嬢ちゃん！！逃げろ！！！！」

うるさい。

周りを見渡す。

仰々しいお出迎えですね。

兜を被り、鎧が指先、爪先まで・・・と。フルプレートというのですか。

サースさんの方を見ると、縛られているようだ。

良かった。少しは信用したのに売られていたとしたら最悪だった。

村の中の誰かか。いや、売らなかつたとしても、こんな鉄の塊みたいのに脅されたら喋ってしまうだろう。

サースさんに謝罪する。そしてお礼をする。

「お前が、ミナミ・クサカか？」

はいそうです。違うといつても信じないのでしょうか？

奥の人に尋ねると、兜を外し答えてくれる。

「そうだな。俺がいるからな。」

エル・・・なんとかさんだ。

「エル・シユタインだ。覚えてもらわなくて結構だがな。」

で、どうするんですか？分かっていますけれども。

「盗難と暴行の罪だな。我が主の所へ来てもらう。」

警察とかは無いのだろうか？その罪はどうやって償えばいいのですか？返せば盗難は無くなりますか？

「そんな訳はないだろう。まあその話は主の所ですればいいだろう。お前からこいつを縛り上げる。」

少し待ってもらえますか？着替えがしたいのですが。

「ハッ！そんなものさせるわけがないだろう。その服に何が隠されているのかも分からないのにな！」

名前も分からない人がってピッコロさんですか。緑色の前髪がちよっと兜から出ていますね。

パジャマに緊縛ですか。変態ですね。超変態いや野口君風にならウルトラ変態というやつでしょうか。野口君が聞いたら、すごい否定をされそうですね。

「何を笑っているんだか知らんが拘束させてもらう。」

火を出してもいいのだろうか・・・サーズさんの家が多分無くなる。この火は燃やし尽くすまで消える事がないようだった。燃え広がる事は無いみたいだが。

後ろ手に縄を掛けられる。痛い。縄で縛られた事など人生で初めてだ。初めては野口君が良かった・・・いや、ない。縛るほうが良い。

足も縛られる。どうやって歩けと。思ってたら、担がれた。荷物か。

馬車まで担がれる。途中でサーズさんや村の人に謝っておく。

馬車の中に投げ込まれた。出来れば荷物も・・・と思ってたら服が入ったと思う袋も投げられた。

ポーチも・・・と思ってもさすがにナイフは返って来なかった。しようがない。あれは元々私のものじゃない。

ガタガタ揺れる。うん痛い。動けない。ゴロゴロ転がるくらいしか出来ない。

さて、眩暈の通りになってしまった。けれども眩暈のときは制服だったはずだ。未来は変わったはず、けれども同じ結果と。

なんだったかこれは。タイム・・・タイム・・・なんでもいいか。

確か歩いて半日ぐらいだったから馬車としても3〜4時間はかかるだろう。

眠たい。寝ていいかな・・・頭が回らない。いや、目が覚めきるまで1時間はかかる。寝ないほうがいいかな。

エルさんが馬車を操ってるみたいだ。すごい。馬なんて乗った時がない私からしたらどうやってたら馬車が引けるような馬が操れるのか分からない。

「ミナミ。」

話しかけられた。返事をする。

「何故、逃げた？」

説明が難しいです。

「ふん、まあいい。主がお前を呼んでいるから連れてこいと言って

いる。俺達はその命令に従うだけだ。」

独り言ですか？独り言はモテなくなるといいますよ。

「お前に言っているんだ。まあ罪に関しては気にしないでいいそう  
だ。そんなものはどうでもいいと言っていたからな。」

では、縄を外してもらえますか？胸が板に直接当たって痛いんです。  
「上を向けばいいだろう？ああ上を向くと腕が痛いのか。我慢しろ。  
まあ痛くなる胸もそんなに無いだろう？もし、ここで逃げられでも  
したら俺達は職を失うだけで済まない可能性がある。」  
うるさい。

困りましたね。逃げたらエルさん達まで処分される可能性があるの  
ですか。どこまで話を信じたらいいのか分からないのが困り物です  
ね。

一人でいる3時間は長いが、二人で話す3時間は短い。3人ならも  
っと短かったんだけど。

・・・さて、すぐろくでいうならスタートに戻るといったところか  
な。

まさか最初のサイコロで2ぐらいを出したらいきなりスタートに戻  
るがあるとは思わなかった。

今度はお屋敷へ。さて鬼が出るか。蛇が出るか。もしかしたらファ  
ンシーな猫・・・猫がいいな。

野口君は猫が好きだったな。猫耳をつけて今度会いにいつてみよう。

そんな事を考えていた3時間だった。



6話・緊縛？なにそれ美味しいの？（後書き）

6話終了。

皆様見て頂き有難うございます。



## 7話…どうなるこつなる？（前書き）

7話投稿完了。

日曜日は失礼致しました。

毎日投稿をするつもりでしたが、仕事が忙しく10人もの方が見てくれたにも関わらず投稿できずでした。

火曜が休みのため火曜日に4話から3話投稿しようと思っています。

是非、変わらぬご愛読をよろしく願います。

・・・・お気に入りか2件なのに後の8人はどこから来たのだろう・・・

・最底辺ランキングとかで来てくれたのかな。

7話…どうなるこじつなる？

「ミナミ、着替えて来い。」  
縄を解いてくれますか？いつまでも担がれているのは少々。私も乙女ですよ？

「ああ、連れていってくれ。」

「はい。畏まりました。シユタイン様。」

メイドさんですね。本物は初めて見ました。メイド喫茶とは違ってスカートが長いんですね。

「では、失礼します。」

担がれました。力持ちなんですね……。荷物ですか。

「ミナミ様、失礼します。縄を外しますが、暴れないよう。私はこの館の侍女責任者をさせて頂いておりますマールと申します。」

マールさんですね。カタカナの名前は覚えずらいです。後、ここまで来て暴れはしません。

罪には問われないようですしね。

「では、失礼します。」

脱がされました。下着もですか？出来れば一人で着替えたいのですが？

「勿論、駄目です。」

一蹴ですか。そうですね。

「こちらの、黒のドレスに着替えて頂きます。」

制服ではないのですか？何故？と聞いても答えてはくれないのですよ。

「ご明察、ありがとうございます。少々話を聞いていた方とは違うようですね。」

どんな話か気になる所ですが、まあいいです。

「化粧と髪に関しては・・・髪だけ櫛を通させて頂きます。貴方のような若い方ですと化粧が無くても大丈夫でしょう。」  
「ありがとうございます。1日森の中を歩いていたので髪がちょっと気になっていたので。」

「では、主の所へお連れいたします。」

「主さんって人は何故私に会いたいのでしょうか？」

「私共は主の命令に従うまでです。」

「そうですか。そういうものなのですね。この命令人間。」

「貴女も似たものでしょう。」

「そうですね。良く分かりましたね。」

「匂いで。」

「犬か。」

「主。お連れ致しました。」

「連れられて来ました。」

「ああ入ってくれ。」

「エルさんもいるようだ。少しは安心。できません。アウエーど真ん中すぎて知った人がいるだけで安心出来てしまいそうです。」

「ああ、ミナミそこに座ってくれ。」

「はい。床ですか？それはちょっと・・・。」

「違う！その椅子だ。」

「はい。ソファアに座ればいいんですね。あっコーヒーが飲みたいです、マールさん。」

「お前は自分の立場が分かっているのか？」

「何かしらの利用価値があるのでしょうか？貴方の主様にとって最大限」

の利用価値が私にある。それだけ分かっていたら十分でしょう。

「ふん。ミナミ、お前は人に嫌われるだろう。馬鹿の振りをしてい  
るのにも関わらず、その馬鹿さが隠せていない。いや、違うか。隠  
してない。」

フフフ。乙女の秘密ですよ。エルさん内緒にしておいてくださいね。

「もういい……。お前の相手をし」

「お前、ミナミ・クサカといったか？」

主さん、エルさんの言葉最後まで言わせてあげて下さい。

はい、と肯定の返事を返す。

銀髪が良く似合ってる。エルさんよりも少し年上30歳ぐらいとい  
った所か。

「お前、俺の娘になれ。」

……。もう一度よろしいですか？

「ミナミ・クサカ、俺の娘になれといったんだ。」

突拍子も無い人ですね。エルさん？貴方の主は説明も無しに養子を  
取る方なのですか？

「ああ……。ミナミ。主は……」

「ふむ、俺の養子になればとりあえず美味しい物は食えるぞ。後、欲  
しいものがあればなんでもやろう。」

そうではなく……。もういいです。理由が聞きたいのですが？それ  
に加えて私は18歳。貴方の娘には少し大きすぎるのでは？

「嘘だろ！？12・3歳にしか見えないぞ！」  
うるさい。

「そうか、理由か……。簡単にいうと政略結婚だな。」

簡単すぎます。もう少し……。ん？政略結婚？

「ああ、お前も分かっているだろう？カツヤ・ノグチという勇者が

誕生したのを。」

ええまあ。野口君ですからね。

「今回の勇者は若く、猛々しい男だと聞いた。それに加えて珍しい黒髪というのをな。」

「猛々しい・・・ヘタレではなく。猛々しい。野口君には似合わない形容詞ですね。」

「俺の家に紛れ込んだ黒髪の顔も悪くない女がいると聞いてな。カツヤ・ノグチの後妻にでも入れればと幸い。最悪、後宮にでも入れれば俺としては満足なんだがな。」

「・・・ふむ。そういう事ですか。野口君、ハーレムを作る気ですか？異世界だからといっていい気になっていませんか？調子にのっていると天罰が起きますよ。例えばパンを食べると全てワサビとカラシが入っているかもしれませんかから気をつけて下さい。」

「理由はこんなもんだらう？俺の娘として王都へ行き。カツヤ・ノグチを落とす。そのドレスも似合っているしな。思っていたよりも良い所のお嬢様には見えるぞ。」

話を聞いていなかった。なんだらう？お礼を言っておこう。ありがとうございます。

「ああ、良いのか。思ったよりも物分りがいいのだな。では、私の名前はトラビア・シュタイン。このシュタイン家の主をやっている。」

「・・・？エルさん？なんで警備なんてしているんですか？

「ああ。長男は対外的なこと。次男は家の事をする。それがこの家なんだ。」

夫婦みたいですね。トラビア×エル萌え？

「意味は分からないが、否定をしておこう。」

「ミナミ・クサカ。お前はこれから”ミナミ・シュタイン”と名乗

って王都へ行ってもらう。」

あれ・・・？何故かOKしたことになってる？・・・まあいいか。  
野口君と早く会えるというのなら、何の問題もない。

「2週間後、王都へ向かってもらう。」

長い。明日でもいいですよ？というか明日にしてもらえませんか？  
「勇者に好かれる自信がよっぽどあるのか？マールに仕込んでもら  
うつもりだったのだが。」

ええ。あります。私と野口君は赤い糸で結ばれていますから。

この国のいるかは分かりませんがお姫様にも負ける訳がありません。  
「はっはっは！絶対に無理だな！ノーラ姫と勇者は、かなり親密だ  
と聞いている！今からお前が行ったとて絶対に無理だろう！」

ピキッと音が鳴った気がします。顔が引きつりそうです。いや、引  
きつっているのでしょうか。エルさんもトラビアさんも顔が引いてい  
ます。ドン引きというやつですね。

トラビアさんに明日で結構ですと言い。今日はマールさんに勉強を  
教わっておきますね。

では失礼しました。あっいえ、”お義父様”、失礼致しました。で  
は明日。

「う、うむ分かった。マール、今日はミナミの世話をしてくれ。」

野口君。会う時が楽しみです。フフフフフフフフフ。

7話…どっになるのっ…(後書き)

6話終了。

野口君死亡フラグがたっできております。

はてさてどっになるのっやな。

**8話：説明回。（前書き）**

8話説明回。

ちょっとしたことの説明ですね。

20時ぐらいにもう1話いきます。



## 8話：説明回。

「では、ミナミ様。このドレスは夜会で使用するため、また着替え  
て頂けますか？」

制服に着替えてもいいですか？いいですよね？

「ええ、勿論。今日1日私とずっと一緒ですからね。逃げられると  
いう事も無いでしょう。」

信用されてませんね。

「勿論でございます。」

即答ですね。

「勿論でございます。」

この・・・メイドー！

「メイドではなく侍女です。」

そうですか。

「勉強といつても、何をでしょうか？私に答えられる事など少ない  
と思いますか？」

常識を教えてください。

「ミナミ様に常識を教えることは不可能でございます。」

な、なんだって！ああ・・・私がすごい常識人すぎて教えることが  
ないと。

「いえ、教えてもしないと分かってる人に教える意味がありません。

」

そうですか。

「夜会の作法等は知っていますか？」

一緒について来て。

「主の命令がありましたら。」  
お義父様とか呼んだら大丈夫では……いやないか。そんなのは小説の中の親馬鹿だけだ。

王都まではどれぐらいかかるの？

「馬車で5日ほど」

……全部で1週間……か。3日以上野口君の顔を見なかった日はここ数年無かったから、私がどうなるのか想像もつかないな。

モンスターって何？

「動物に近いものですね。王都から遠ければ遠い程多くのモンスターが出るそうです。大体が普通の動物よりも倍。2倍と大きい動物をモンスターと呼びます。」

という事は、あの猪もモンスターと……大きいわけだ。

「稀に人型というモンスターもいますが、私は生まれて1回も見た時はありません。聞いた話ですと、人と見た目がまったく変わらず、体のどこかに刺青があるとの事です。」

それは、倒すの大変そうだ。人なのかモンスターなのか分からないじゃないか。

「ええ。ですので、専門の人達が王都周辺にはいるそうですよ。」  
ふむ。専門の人……達ねえ。

火を放つ魔法というのは強いのか？

「火を放つ？いえ、火を手から放つことは出来ません。」  
え？

「剣を持ち。剣に火を纏わせる。弓矢の矢を火で纏わせて打つなどは出来ませんが。」

・・・そうですか。では、私の見間違いですね。先ほど村で火を放つてる人が見えたので弓矢と勘違いしたのでしょうか。

・・・後で考察。

食事マナー。ドレスでの歩き方。淑女らしい話し方。とりあえず簡単に行っていく。出来なければ、5日の間になんとかしよう。

1日なんてものはすぐに過ぎ去ってしまう。夜になり、食事の時間だ。

エルさんとトラビアさんと一緒にだ。マールさんも隣に立っている。・・・二人共貴族なんだと実感。私もフォークナイフは使えるが、あそこまでの優雅さはないかな。

「どうした。ミナミ。」

いえいえ、食べていてください。

「食べづらいから聞いたんだが？」  
慣れてください。

「お前の視線には一生慣れそうにもないよ。」  
慣れなくても結構です。

「どっちだよ!!!」  
うるさい。

トラビアさんは・・・と思ってるよ。

「ミナミ・クサカ。」

フルネームですか。

「明日の朝、馬車がくる。起きたら荷物を持ち下の広間に来い。」  
起こしてください。  
私はこれでも朝がすごい弱いんです。

「当然だ。庭で一晩中寝ていられる奴の起きれるなぞ信用するに値しない。」

硬かったです。

胸が痛くなりそうでした。

「ふんっ」

一蹴ですか。鼻で笑われましたよ。

何も言われないのもそれはそれで嫌なのですが。

「マール。ミナミを湯浴みさせて今日は寝かせる。明日に支障がないようにな。」

「はい、かしこまりました。」

一人で入りたいというのは駄目なのですね。

「勿論です。」

即答ですね。

「勿論です。」

笑顔がまぶしいっ。

あのすいません。マールさん。後ろだけでいいです。前はいいです。髪は嬉しいですが、前はいいです。

「自分で洗うと洗っていない位置がでてきます。ミナミ様は気にせず。」

気にします。

「・・・」

無視ですか。あの、本当に！前はいいですから！

「・・・」  
あの、ちよつと！  
「・・・」

野口君。私は汚されてしまったよ。私はもうお嫁にいけない。野口君にきちんと責任をとってもらおう。そうしよう。うん。・・・寝よう。忘れよう。

「お休みなさいませ。ミナミ様。」  
貴女の顔を見るたびに忘れたい事を思い出しそうですね。  
王都には絶対についてこないでください。

「忘れていました。ミナミ様。主命により、私もミナミ様に同行することになりました。短いとおもいますが、よろしくお願いいたします。」  
「・・・久々に自分自身を呪いたくなりますね。マールさんの鉄面皮！  
「ええ侍女ですから。ではお休みなさいませ。」

「・・・こちらへ来てから私のペースが崩れている気がする・・・。  
これもそれもあれもどれも野口君のせいだな。」

「・・・早く会いたいな。」

## 8話：説明回。（後書き）

ではでは第8話終了させていただきます。  
読んで頂きありがとうございました。

## 9話：RPG風な異世界（前書き）

話がすみませんね。

毎話2000〜3000文字程度でまったりやっていきます。

本日も見て頂き、ありがとうございます。

では続きをどうぞ。

## 9話：RPG風な異世界

「ミナミ様。ミナミ様。」  
後5分。

「ミナミ様。起きてください。」  
後4分30秒…

「起きないと、どうなるか分かりますね。」  
起きます起きます。

「マイルさんおはようございます。今日も良い…天気かどうかは分かりませんね。」

「真っ暗です。寝ますね。おやすみなさい。」  
「起きろ。」

頭を叩かれたのは久々だ。少し懐かしい空気に顔が笑っているのが分かる。

「どうしたのですか？ミナミ様？お顔が余計におかしくなっておりますよ？叩かれて喜ぶ性癖でもあるのですか？」  
うるさい。マイルさんはいつも通りですね。  
後、叩くほうがいいです。

「では、着替えて下へ降りて来て下さい。朝食は馬車の中で軽く済ますそうですので、お早めに。」  
制服へ着替える。なんだろう。たった2日なのに学生というのを忘れてしまいそうだ。

これから5日間も馬車の中で生活か。歩くよりはましとはいえ、少し憂鬱だ。



早く自宅に帰って自分のベッドで寝たいものだ。

そういえば学校は、どうなっているのだろう？ 絢子さんは、心配してるのだろうな。

フフフ。野口君と異世界で旅をしていた。と言ったら絢子さんはどんな顔をするだろうな。

今から帰った時が楽しみだ。

「来たか。いくぞ。」

おはようございます。お義父様。とてつもなく怪しい響きですね。

お義父様というよりも愛人とかのほうがしっくりきそうなのですが。

「俺としては、そちらでもいいのだが？」

お断りしておきます。

馬車が揺れる。

暇です。

トラビアさんは、無口なというか書類を見えていますね。

マールさんは・・・上手な手綱捌きですこと。

「ミナミ。」

なんですか？

「お前は、どこから来た？」

説明しがたいですね。日本とって分かれますか？

「場所は知らん。だが名前は知っているぞ。」

そうなのですか。これは意外です。もしかして、ここは地球・・・  
いえいえ火のことを忘れていました。

「前回の勇者が最初に発した言葉がそれだったからな。」

「ここは日本か？日本に帰せ。そんなところでしょ。」

「ほお、よく分かったじゃないか。」

私も言いたいですから。」

「ふん。だが、前回の勇者はモンスターに殺され、それ以降音沙汰もなくなつたがな。」

ふむ勇者でも負けることがあるのですね。」

「ああ、前回の勇者は俺でも殺せそうだったからな。」

怖いことをいいますね。その勇者はよっぽど弱そうに見えたのでしょ。」

「今回の勇者は皆の期待が強いはずだ。若く。遅しく。そして何より強い。」

ん？前回の勇者は若くなかつたのですか？

「ああ、私が20歳。10年前だな。その勇者は62歳だと言つていたな。」

・・・それは無理でしょう。この国も少しは頭を働かせるべきだと思いますよ。」

「だが、この国には300までも生きる見た目若者もいるからな。」  
「そうなのですか。そんな人がいるならば62歳は若い人なのかもしれませんね。」

つてないですよ。私何を納得しようとしてるのですか？300歳ですよ？」

「ああ、そんな奴は一人しかいないから安心しろ。」

そうですか。何人もいたら不気味ですよ。」

「そいつは、時を操る事が出来るらしいな。だから何年時間が動くと見た目はそのままである。と俺は聞いた。」  
「会つた時はないのですか？」

「無いな。放浪癖があり、気に入った者にしか近づかない。この国でも会つた事があるのは数人だろう。」

その後、数時間話をした。

ふう……ありがとうございます。

私の暇つぶしに付き合ってくれて。”お義父様”

「ふん。暇だから付き合えと顔に書いてあったではないか。ミナミ。お前は顔に出やすいのだな。」

わざとですよ。

「ふん。そうか。ならいい。王都にいったらそのような顔を見せの  
ではないぞ。」

分かっていますよ。

……ふむ。情報が揃って来たという感じはしますね。

”時”。これが帰るキーワードという所ですか。

RPG風な世界。私の目標は野口君と一緒に帰る。

やはり帰れる可能性は高そうですね。

後は……野口君のほうをなんとかして、一刻も早く帰ることにし  
ましよう。

夢なんてものは、当たらない方がいいのだから。

## 9話・RPG風な異世界（後書き）

見て頂きありがとうございました。

まあ5分で見終わるぐらいの量なので、他の面白い小説までの場繋ぎにでも使ってください。

では。

## 10話：回想という名の妄想2（前書き）

まずは、クリックありがとうございます。

お気に入りが増えたりなっていました。

評価を付けて頂きありがとうございます。

評価が付いて居ない作品も沢山山のようにある中、点数を付けて頂けるこの作品は幸せ者なのでしょう。

後、昨日のPVが異常でした。

この4日間のPV数と昨日1日のPV数がほぼ同数。

どうなっているんだ・・・。

では回想回2回目。

## 10話：回想という名の妄想2

荷物を背に当て、揺れている馬車に身を任せる。

これが一番疲れないですね。

出来れば柔らかいクッションが欲しいですが、お義父様も布を置くだけの所を見るとクッションは無さそうですね。

・・・甘いものが食べたいですね。3日目、毎日考え事をするのは・・・疲れます。何も考えないというのも良いのですが、確実に悪い方向へ行く予感がします。

「なんだ、その顔は？」

お義父様。甘いものはありますか？

「甘いもの？王都へ行けば食べれるぞ。」

そうですね。甘いものはあるんですね。それは楽しみです。

「何が食べたいの？」

ケーキですね。チョコレートのを希望します。

「ケーキ？ちよこれーと？それはなんだ？」

ケーキとチョコもないのですか。この世界の甘いものとはなんなのでしょうか。砂糖はあるのでしょうか・・・。

「砂糖はあるが、あれは調味料だろうか？」

これは困りました。砂糖があるのにデザートはないのですか。この国の料理人は研究熱心ではないのですね。

「ふん。果物でも買って欲しいのかと思っただわ。」

果物が甘いものに分類されるのですか。先日の食事にはパンがありましたからケーキぐらいは作れそうな気がしますね。ああ卵があればクッキーでもいいですね。

そういえば、野口君は甘いものが苦手だったね。小さい時はあれだけ好きだったのに。

甘くないバレンタインチョコや、クッキーなりを作るのは大変だった。  
最近はずいぶんチョコもあつたので楽にはなつた。昔、塩入りチョコとタバスコ入りチョコを食べた時は、すごい顔をしていただけだね。  
その年のホワイトデーはワサビ飴をもらった。野口君仕返しは良く無いと思うよ。  
わざとだけだね。

「南！チョコくれチョコ！」

野口君？君は何をいつているのかな？チョコレートは私の栄養源だよ？それを奪うというのかい？

君はなんて残酷なんだ。君にあげるチョコレートは無いよ。

「そんなの初めて聞いたわ。お前コーヒーとか好きなのに甘いものも好きだよな？」

それにはまったく関連性がないね。甘いものを食べるからこそ、苦いものが美味しいのじゃないか。

で、何故チョコレートを私から奪おうとしたのだい？

「ああ明日バレンタインだろ？中学の奴らが何個もらったかで勝負とか言い出してな。俺だけ1個も無いんじゃないか。」

ふむ、それは可哀想だね。

「そうだろ？そうだろ？だからくれよ。」

ご愁傷様。1個ももらえなかつた野口君。

「まだバレンタインは始まってないよ！しょうがねーか。まあ明日下駄箱とかに入ってるかもしれないしな。」

そうだね。もしかしたら入っているかもしれないよ？

「南！！見てくれ！今朝学校に行ったら下駄箱にチヨコが入ってたんだよ！漫画みたいな事本当にあるんだな！いやー俺も、もてるようになったな！なんとか勝負にも勝ったしな。あいつら全員学校にいる間にチヨコ貰えてなかったしな！」

うるさい。良かったじゃないか野口君。どうだい？早速1個食べてみては？

「そうだな。誰がくれたかわかんねーけど5個ぐらい入ってるしな。南も1個食べるか？」

いや、私は遠慮しておくよ。

「遠慮しないでいいぞ？お前の栄養源なんだろう？」

いや、その子が頑張って作ったチヨコレートなのだろう。野口君が食べるべきだね。

「ああーそういうもんか。じゃあ1個。」

野口君の顔が真っ赤になった。トマトみたいだな。

「かれえ！超かれえ！ウルトラかれえ！なんだこれ！いたずらか！？」

野口君に水を手渡す。

ああ、それはタバスコチヨコだね。野口君は確か甘いものが苦手だったはずだろう？頑張ったのだよ？

「……ん？南！！てめえ！何しやがる本気で息がとまっただろうが！」

頑張ったのだよ……？

「う……だまされねーぞ！はあ……初めて貰ったチヨコがこれかよ……」

では2番目も私だな。

「ん？何が2番目だった？」



「南！よおー！」  
うるさい。どうしたんだい？野口君？

「いやー今日ホワイトデーだろ？これ南のために買ってきたんだよ。」  
「あぁ今日はホワイトデーだったのかい？飴？ありがたく貰っておくよ。」

「いやー選ぶの苦労したぜ。えらいフアンシーな店まで行って入れ物探したりするの大変だったんだぜ？」

「そうなのかい？そこまでしてくれるとは思わなかったな。ありがとう野口君。」

「い、いやいいんだ。飴程度でそんなに喜んでくれるとは思わなかったがな……。」

「こういうのは気持ちだよ。野口君。で、なんで目が泳いでいるのかな？」

「いやあーうんうん飴を早く食べて欲しくて走ってきたからな！」  
「関係無い気はするがね。」

「では好意に甘えて。うん。この辛さわさびだんげホツ……。」

「野口君？君は女の子にワサビを食べさせて喜ぶ嗜虐趣味でもあるのかな？」

「へっへー！！バレンタインのお返しだよ！」

「そうかい？来年を楽しみに待っているんだね。野口君。精々来年までの1年間背中に気をつけることだ。夜は出歩けないと思ったほうがいいね。」

「怖っ！なんだその台詞。すげー怖いじゃねーか！」  
「ふん。少し楽しみだったのだから。」

「ほら。」  
「頭に何か置かれる。」  
「動けないのだが？」

「まぁまたな！」

「タバスコも食べてないのに真っ赤だよ野口君。」

チリンと鳴る片方だけの小さなリングイヤリング。中学生の買える物だ。高いものどころかチープなものだろう。ずっと付けていたな。当たり前のように付けていると外すのを忘れてしまうな。たまにつけたままお風呂にも入ってしまうしな。

「何を笑っているのだ？」

ええ昔のことを思い出していたのですよ。

「ふん。その顔でずっといられるのならば世界中の男を虜に出来るかもしれないな。」  
無理ですね。

この顔は野口君と一緒に時にしかできませんよ。

## 10話・回想という名の妄想2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

では、今日はお休みのため3話はUP予定です。  
時間は起きたら書き出しますので、昼過ぎと夜に掛けてかと思いま  
す。

では11話でお会いしましょう。

11話・じつぎすーぶ。(前書き)

読んで頂きありがとうございます。

11話UP完了です。

眠いです。

けど面白いですね。物を作るというのは。

後、皆様のお勧め小説などが知りたいですね。

感想は書かなくていいのですが、まあ書いてくれると嬉しいですが、お勧め小説。これはというのがあったら感想の所にも書いて頂けると嬉しいです。

では、皆様方11話をどうぞ。

## 11話…つとぎすーぶ。

森を抜けた。

マールさん。お疲れ様です。私も変わってあげられたらいいんですけどね。

「ミナミ様ありがとうございます。お気になさらず。」  
広い。一面の大地だ。日本に居た時にこれだけの平地は見た時がなかったな。

どんなに綺麗な農地でも遠くにはビル郡があったり家があったりするからね。

「ミナミ様の住んでいた日本という国は、栄えていたのですね。」  
栄えすぎて廃れてきていたと思うがね。建物の中で農作物を育て始めてきていたのには少々気が触れたと思ったよ。

「外で作ればいいのに、建物の中で作るのですか？」  
近場の外では農作物が作れる土地がないのだよ。

「それはそれは。その国は近い内にいずれか滅びるでしょう。あるがまま。ありのまま。それが出来なくなつた時に国は滅びます。」  
だろうね。栄枯盛衰。国はいずれか滅び。そして新しい国が出来る。それがいいのではないか。

時代の節目に生きていくというのは寂しいが、それもまた面白いだろう？

「それはそれで楽しいのでしょうか。」  
まあ、この国もいずれか滅びるだろう？外部の人間を呼び。国を守つてもらおうようでは。

「どうなのでしょう。ですが勇者がいなくても、モンスターなどは国の騎士達で倒せているようですけどね。」

・・・では、なぜ勇者を呼ぶ必要がある・・・？

「数十年にたった1度厄災が起きるのです。その時に勇者の力が必

要なのです。騎士団では手も足もせず、国が壊滅するか。勇者に倒されるか。」

厄災ね。魔王といった所か。これを倒せば帰れるのか？・・・なんとなくだが違う気がするな。いや、倒さないといけないのだろう。ここでこの話が出るということ・・・

眩暈がした。倒れそうだ。

「どうしたのですか？ミナミ様？顔が真っ青ですよ？」

ああいや、大丈夫だ。手を振る。

「南！楽しいな！お前とこうしていられるのは！」

「ふん！野口君！私は君とこんなことはしたくはない！早くその剣を下ろせ！」

・・・最初の夢の前か？なんだ今の会話は寒気がした。何故だろう。

野口君。少し君に会うのが怖くなつた気がするよ。

いやないな。私が野口君を怖がるだと？あり得ない。

「ミナミ様。少し横になられては？顔が真っ青すぎて見ていられません。」

ああ、マールさんありがとう。

「ミナミ。どうした？そんな顔をして。」

いえ大丈夫です。横にならせて頂きます。

「ならいい。少し横になつていろ。おいマール馬車を少しの間止めておけ。俺はこれから猟に行く。」

「はい主様。こちらはお任せ下さい。」

2〜3時間は寝ただろうか。

「あ、ミナミ様起きましたね。顔色も戻ったようで安心しました。」  
挨拶をして水をもらおう。喉が渴きました。

「こちらを食べて下さい。ウサギ肉と山菜が入ったスープです。」

・・・ありがとうございます。マールさん、それとお義父様。

「いえいえ、私は料理をただけです。御礼ならば主のほうへ。」  
寝ているのですが。

「久々の猟で疲れたといっていましたよ。最近は猟など全くしませんでしたからね。」

ふふっ貴方もツンデレでしたか。獣臭いスープだ。私が今まで食べてきたものの中でも不味い方に入る。けど暖かいな。それで十分だ。  
「そう言つて頂けると助かります。肉というのは熟成させたほうが美味しいですからね。」

野生の獣なのだから当然だろう。

「ミナミ。体調管理はきちんとしろ。お前は商品なのだ。そのような顔は商品価値を下げる。」

はい。ありがとうございます。お義父様。というか起きていたのですね。

「ふん。俺は寝る。2日後には到着する。精々自分を磨くのだな。」  
そうですね。そうなのでしょう。

後2日。野口君、君はこの1週間何をしていたのかな。

私は結構な苦勞をしている気がするよ。

君に会ったら何から話そうか。話すことが沢山ありすぎて、何から話そうか迷ってしまうよ。

夜会に行く前にクッキーでも焼かせてもらおう。どこかのキッチンを借りれるだろうか。

この国の人達に配って。トラビアさんにもマールさんにもエルさんにもあげよう。

たった4日。縛られたりしたが、私一人だったのならば食事にも困っただろう。

野口君。君もきちんともらった恩は返すんだよ。もらうばかりでは人間関係というのは成り立たないからね。いずれか大きなもので返さなくてはいけなくなる。そうなるからでは遅いのだよ。

思わず笑ってしまった。高校に入ってから私は私が心配する事はなくなり、いつも私が心配されていたのにな。小学生の時に戻ったようだ。

・・・これはこれで悪くない。そう思えた。



11話・うさぎすーぷ。(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

ウサギ肉は食べた時はないですね。

ジンギスカンは匂いがきついですが美味しいのですから。

ウサギもそこそこ美味しいのでしょうか・・・

今日中に12話は投稿予定です。

12話・幸せはどこにある。(前書き)

クリックありがとうございます。

お気に入りかいつの間にか4件になっていました。

次は5件を目指して頑張ろうと思います。

では第12話どうぞ。

## 12話：幸せはどこにある。

壁が見えた。なんだろうあの壁は。

「ああ、見えて来ました。主、起きて頂けますか？門を通ります。」

「そうか。もうそこまで来たのか。」

門？あれは壁だろう・・・。

「あれはモンスター対策ですね。後は犯罪者を王都へ近づけさせない為の門です。」

真横に遠くまで伸びる壁。ベルリンの壁というのもこのぐらいなのか気になる所だな。

まあ日本には無いものだろう。万里の長城にも匹敵するのではないだろうか。

「通行証を見せてもらう。」

門番か。あの大きな壁を抜けたら王都か。門を抜けたらどんな街並みなのかは楽しみだな。

ビル郡ではないのだろう。いや。ビル郡だったらビル郡で面白いな。違和感しかないが。

「ほら。」

眼科検診？あかんべーの舌を出していない状態？何をしているのだろう？通行証というのはカードではないのか？

「ああミナミ様。カードもあります。こちらに。」  
「そうなのか。カードだけではないと。」

「ええ。皇王に近い者は目に紋章を宿します。」  
痛そうだな。

「いえ、痛くないそうです。生まれた瞬間に可能性がある人は全て、専門家に紋章を入れていただけそうですよ。逆にいうとその紋章が無ければお城には入れないという事になります。」

ん？マールさんは城にはいけないのか？

「いえ身の回りの世話をする従者は数人、十数人でしょうか。それぐらいならば入れます。主一人でなど絶対の安全があるうともあり得ません。」

何かあつた場合は命をかけて守ると。

「勿論です。」

良い笑顔です。

「そこのお前、目を見せてみる。」

私もですか？

「ああ、こいつは紋章を持っていない。つい先日、私の養子となつたのだ。」

「そうですか。では王都に入りましたら、紋章を付けて頂いて下さい。お戻りになる時に紋章が無い場合はその方だけ通せない可能性もあります。」

「ああ、分かっている。」

銀貨らしいものを渡していますね。チップか私達が通つたことを秘密にする口止め料というところでしょうか。まあ前者でしょう。

「ミナミ。お前に紋章はつける気はない。」

そうですよね。

「ああお前が勇者に気に入られなければ。そのまま放り出すだけだ。ああ最悪俺の妾にでもなつてもらうか。」

いえ、結構です。始めてが、お義父様というのは少々。

「ふん、まあ気に入られれば、王都にいることになる。紋章の意味がないからな。それよりも俺の紋章よりかは王族の紋章でも貰つといい。」

まあ、野口君ならば確実にでしょう。

ですが、何かしらが原因で断られる可能性もあるでしょう。  
野口君以外の人の思惑もありそうですね。

さて、門を通る、どんな街か。眩しいな。なんだろう。

一面の金色の畑か。通りで眩しい訳だ。小麦か？それにしてもすこ  
い色のような気もする。

「すごいでしょう。初めて門を通った人は皆そのような顔をしてい  
ます。」

ええ、ここまで見渡す限りの金色の畑は見た時がないですね。CG  
のようです。

「CGとは良く分かりませんが、これは王都に住む人達のための畑  
です。近くに集落もいくつかありますよ。」

・・・そういえば王都はどこに？

「ここから後1日も経たない内に到着しますよ。」  
まだ1日もかかるのかい？遠いね。本当に遠い。

いつになったら野口君に会えるのかな。そろそろ本気で野口君栄養  
素が不足してきたよ。

そんなものは存在しないが。私の中には確かにあるのだろう。

お義父様をいじっても、駄目。

マールさんはいじる方。

これでは、発散ができないではないか。

「いじってさしあげましょうか？湯浴みの最中でも布団の中でもよ

るしいですよ？」

いえ、結構です。

「少しはいじれば、胸が大きくなるのでは？」

うるさい。そんなものは迷信だ。揉めば大きくなるのだったら世の中の胸のほとんどは大きくなっているだろう。

「そうですね。大体脂肪の塊なのでですから揉めば小さくなりそうですね。」

うるさい。小さい時に試した私を馬鹿にしているのか。そんなにトラウマに触れたいのか。

「ふふふ。ミナミ様。気にしない事です。殿方は胸の大きさは気にしませんよ。」

それはないね。男という人種は胸が大きければ大きい程目がいくものなのだ。

「それは目がいくだけでしょう？好きかどうかは別物ですよ。」  
分かっているがね。

分かっているが、あまり分かりたくはないね。

「そうですね。私達は見られる側。殿方は見る側。見る側の意見など、どうでも良いことです。」

私は見るけどな。

「そうですね。では、私が見てさしあげましようか。」  
結構。

「そうですね、残念です。」

・・・野口君。女の魅力は、胸だけではないよな・・・？

愛嬌とか。私にはないな。

笑顔とか。普段は無表情に近い私は。

・・・この女らしい髪だけで許してくれ。



12話・幸せはどこにある。(後書き)

読んで頂いてありがとうございます。

そろそろ王都へ到着。

11/2からは1日2話の予定でいきます。

日曜日と祝日はどうするかな。と考え中。

最低でも1話はあげますので、よろしくお願いします。



### 13話：料理回またはお菓子回（前書き）

朝投稿するつもりでしたがエラーにより投稿出来ませんでした。  
読んでいただける多くの方に謝礼を。

読んでいただけて初めて小説は完成ですからね。

では13話をどうぞ。

### 13話：料理回またはお菓子回

・・・門の中に門がある。シユールだな。

どこかで、こんな家を見た時があったな。ああ・・・あの万年休載漫画の話だったか。

野口君はあれが好きだったな。

小学生から見るといつていたが、未だに買い続けているのだろうか。

手続きは終わったようですね。

「ミナミ様。本日はもう暗くなりましたので、王都の家へ向かいます。」

そうですね。

「明日は週に1度の皇国の休祭日となるので明日買い物をし、明後日入城予定です。」

野口君と会えるのが遅くなるな。勉強もそろそろしないと危ない気がするな。

帰ったら、遅れを取り戻さないとね。

「ミナミ。食べたいものはあるか？」

いえ、特には。ああそういえばクッキーを作りたいですね。

小麦粉・・・いえパンの粉と砂糖、バター、牛乳、卵当たりでいいですか。通じますか？

「失礼な。ギユウニユウとは何かわからんが山羊の乳でもいいのだから？」

牛がないのですか。それとも乳牛がないのでしょうかね。

「牛はいる。だがあれは肉用だ。」

そうですね。それでもいいです。

ん？バターはあるのですか？

「発酵させたものだろう？先代の勇者が死ぬ前にチーズとバターを作っていたからな。」

・・・そういえばこの国のアルコール・・・お酒の一般的なのは？

「ワインだな。」

そういう事ですか。それはチーズがほしくなるでしょうね。

「ミナミ、酒が飲みたいのか？いいぞ。俺の分も買っていくからな。ついでみたいなものだ。」

未成年です。

「ミセイネンとはなんだ？」

こういう所では不便ですね。異世界。

「酒を飲むのに、年など関係ない。飲める奴は飲む。飲めない奴は皇王の護衛になれないだけだ。」

警備的なものですか。

「そうだ。飲まねばいけない場面もある。その時に酔っていたのはどうしようもないからな。」

飲まなければと思いますが、それでも飲まなければいけない事もあるからでしょう。

活気に満ちてる。幸せそうだ。  
皆笑っているな。

「それはそうだろう。勇者が現れたばかりに加え、その勇者は強いときたものだ。この街の安全は保障されているようなものだからな。」

そうかも・・・しれませんがね。

安全というだけで、この活気。日本も見習わないと駄目でしょうね。

「ミナミ様、こちらでよろしいですか？」

ああ・・・バターと牛乳。いや、山羊乳でしたね。大丈夫です。

「ミナミ。赤と白と青と黄があるがどれにする？俺の分はもう買ったが。」

いえお酒は。・・・なんといいましたか？青？本当に青です。真っ青ではなく緑色が混じった青です。

ブルーハワイですか。

黄色はレモンか何かで作ったワインですか・・・？

黄色はまだいいですが、青は自然の食べ物の色とは思えません。両方ともカキ氷にかかっていそうです。

「赤は渋味 白は甘味 青は苦味 黄は酸味が強いな。」

青汁みたいですね。ゴーヤか何かで作ったワインでしょうか。それは苦そうです。

「お勧めは赤だが青も美味いぞ。」  
では、青色と黄色で。

日本では一生飲める事は無さそうです。

「お帰りなさいませ！主様！」

うるさい。それはそうだろう。20人はいる人達が同時に喋ればうるさい。

「お帰りなさいませ。トラビア様。おや？その方は？」

「俺の養子だ。ミナミだ。」

「そうですか。ミナミ様。私、この館の執事長を務めます。ルックと申します。」

ルックさんですね。覚えました。

「ルック。このワインを今日の飯に出せ。」

「畏まりました。マール、そちらの袋は？」

「こちらの袋はミナミ様のものです。厨房にでも置いて下さい。後

でミナミ様が調理をするようなので、手伝いは一人でよろしいですか？ミナミ様。」

私一人でいいですよ。

「では、一人付けてあげてください。」

無視ですか。

「ミナミ様は料理が出来るのですか。それは楽しみです。何を作ってくれるのか。」

たいしたものではないですよ。

「ミナミ。クッキーとやらは飯になるか？」

なりません。お菓子といっても分らないか。果物みたいなものですよ。

「そうか。なら作ってこい。最後に食べてやろう。」

偉そうですね。ああ偉かつたんですね。忘れてました。

お金を出してもらっているのですから、しょうがないですね。ルックさん。

「こちらです。ミナミ様。」

大きいですね。テレビで見たホテルの厨房並ですね。

「では、私がお手伝いいたしましょう。」

ルックさん？貴方執事で一番偉い人では？お義父様の相手をしなくていいのですか？

「マールがいますので。」

そうですか。

「ミナミ様は料理が上手なですね。そこまで手際が良い貴族の方は私は見た時がありません。」

私は貴族ではないですしね。

「後はこれを焼けば？」

ええ180度・・・火加減出来るのだろうか・・・竈・・・直火に等しいですね。

ピザとか焼いたら美味しそうです。

何度か回転させて上手く調整しましょうか。

「ピザとはなんでしょうか？それもミナミ様の国の料理ですか？」  
厳密には違いますね。

「良い色ですね。」

ちょうど良く出来たようです。

ルックさん食べて見ますか？

「よろしいのですか？では、一つ頂きますね。」

美味しく出来た。100個ぐらい作れば夜会の人全員に配れるか。

「甘く、サクサクとしていますね。このようなものは初めて食べました。」

美味しいですか？

「ええ勿論。主も喜ぶでしょう。」

いえ、野口君に喜んで欲しいのですけどね。

「ミナミ。ご苦労だった。」

偉そうですね。

「偉いんだ。」

そうでした。

「グラスを出せ。注いでやろう。」

ルックさんとマールさんの目が見開いていますよ。

「そうだろう。俺自ら酒を注いでやるなど初めてのことだ。」

それは・・・光栄ですね。

「ふむ、思ったよりは・・・ミリミ。お前は料理が上手いな。」  
「どんなものが出てくると思ったのですか。」

「黒い消し炭が出てくると思っていたが。」  
「そういうのは思っても言わないのが華ですよ。」

「お前にだけだ。」  
「そうですか。」

「これなら夜会で配ったとしても、印象は悪くはなるまい。」  
「それは良かったです。」

「100枚ぐらいでいいですか？」  
「ん？それだけでは足りないな。」

「150枚？200枚ぐらいですか？」  
「全然だな。1000枚はいるだろう。」

「マールさん。明日買い物に今日買った物を30個ずつと明日侍女の人達を7・8人貸してください。」

「・・・配るなんていうんじゃない・・・。」

「まあ・・・野口君も、この世界に来て1週間。食べ物には苦労しているだろう。」

「食べたければ3回まわってワンと言わせるのもいいかもしれないな。」  
「フフフ。」

「・・・本当にしそつだ。やめておじつ。」

13話：料理回またはお菓子回（後書き）

13話終了です。

そろそろ野口君登場です。

南と野口君は二人で一人なところがあるので、ここまで大変でした。

では、また夜に。



14話・覚悟、そして勇者と。(前書き)

14話投稿完了。

先日は1日でユニークユーザーが50人を超えました。

ありがとうございます。

次は1日でユニーク100人を目標として頑張っていきます。

では14話ぐいぞ。

## 14話：覚悟、そして勇者と。

・・・朝からうるさいですね。

部屋の外からドタバタとうるさいです。

淑女と執事ならば音を立てないのが常識なのでは・・・と思っていたのは間違いのようですね。

「ミナミ様！これでよろしいですか!？」

「私達もくつきーを頂きました。初めてこんなに美味しい甘いものを食べました。」

朝からうるさい。

「ミナミ様？もう陽が出てますので起きたほうがよろしいですよ？主様も起きています。」

マールさん。これは一体？

「クッキーを食べたらこのような事に。」

すごい目ですねマールさん。

「ミナミ様のおかげです。」

そうですね。

作り方はルックさんが？

「そうですね。教えたら全員で作りだしてしまいました。」

そうですね。では私はお義父様の所へ行ってきました。

「收拾してから行って下さい。」

貴女の仕事でしょう。

「ミナミ、起きたか？目は覚めているか？覚えていなかったらお前は寝ているのと大差ないからな。」

馬車での生活で分かりましたか。

「当然だ。毎日あのような間の抜けた顔をしていたらな。」  
可愛い顔でしょう？

「今日はお前に合う装飾品を買いに行く。」  
無視ですか。この国は無視が好きですね。

野口君だったら顔を赤くしてくれるはずなのですが。

「そうか。良かったな。黒いドレスに合うのはあるが、お前に合い  
そうな装飾品はない。」

どういう意味でしょうか？

「子供に合う装飾品がないといったのだ。俺には子供がないから  
な。」

うるさい。

「トラビア様、お久しぶりでございます。」

「こいつに見合う装飾品を買いにきた。」

大きい店だな。あまり私はアクセサリーを言うといったことが無か  
ったからそう思えるのか。

「女性の黒髪ですか・・・私も長年商売をしています、黒髪の女  
性は初めて見ました。それもこの長さ、艶、この髪が一番の装飾品  
では？似合うものは中々・・・」

「黒の石に金の混ざりがあつたやつがあつただろう？」

「そうですね。けれどもあれは不純物が混じっているので商品には  
ならなかったのですが。」

「それでいい。長円状態にしドレスにつけさせる。その石に合った  
土台も頼む。」

「はい、畏まりました。では細工に少々頂きますがよろしいですか  
？」

「夕方でもいいか？」

それは無理でしょう。石の加工には結構時間がかかるものです。

「昼までには。」

出来るんですか。

「ふむ。これは駄賃だ。昼に取りに来る。」

「ありがとうございます。お値段はいかほどまで？」

「お前に出来るだけの細工をする。」

「畏まりました。」

「・・・お金に頓着がないのでしょうか・・・。」

いくらでも良いという事なのでしょう。

先行投資というやつでしょうか。

「ミナミ、行くぞ。」

はいはい。お義父様。

鐘がなっている。周りの人達が騒いでる。どうしたのでしょうか？

「ノーラ姫と勇者が民に顔見せの時間のようだな。」

行きましょう。

「慌てなくても明日会えるだろう。」

行きましょう。

「少しだけだぞ。」

周りの人達は全員頭を下げて両手を組んでお祈りをしている。

私も真似したほうがいいのだろうか？

お義父様？

「別にいいだろう。後ろを見ればしてない奴もいるだろう。」

歓声があがった。うるさい。上を見る。小さいな。顔が良く見えな  
い。

「あれがノーラ姫だ。」

金髪ロング。白いドレス。それぐらいしか分からないな。  
もっと大きな歓声があがった。うるさい。

「勇者様ー!」「勇者さまー!」

野口君。すごい人気だね。けれどもプレッシャーも凄そうだね。君  
はなんでも出来るがこういうのは弱かった気がするがね。

変わらないな。短く尖ったような黒髪。人を惹き付ける魅力。頭に  
つけた金色のサークレットと服だけが学校と違うぐらいか。それも  
そうか1週間程だ。

手を振っているな。私も振っておこう。

こちらを見たな。分かったかな?分かったら驚いているだろう。ま  
あ分からないだろう。これだけの人に囲まれているのだから。

お姫様に手を繋がれて歩いて行っただ。互いに目を見て歩いていっ  
てしまったな。

野口君。タバスコチョコレートでは済まない事を覚悟するといい。

「どうだ?ノーラ姫と勇者は仲が良かっただろう?」

ええ、ですが大丈夫です。

お義父様。貴方を見る目は正しかったということを明日証明してみ  
せましょう。

「ふん。あれだけ仲が良い所を見てなおその自信。よっぽどお前は  
勇者のことを知っているのだな。」

ええ勿論。勇者の父母。そしてもう一人の幼馴染。それを除けば私  
が一番でしょう。

その3人にも負けているわけではありませんが。

野口君。ここまで来たよ。1週間会えなくて寂しかったよ。

夏休みだろつと、ほぼ毎日顔を合わせていたからね。

さて、何をすれば戻れるのだろうか。まだ分からないが早く終わらせ日本に帰ろう。

トラビアさん申し訳ありません。ここまでしてもらったのも関わらず。

ですが、私は野口君のためならばこの身を悪魔に差し出す覚悟もあるのです。

私の覚悟とこの世界の覚悟。どちらが強いかな勝負してみよう。

フフフ。勝負とは私も野口君に毒されたかな。

小さい時の野口君は勝負勝負とうるさかったからな。

14話：覚悟、そして勇者と。（後書き）

14話を読んで頂きありがとうございます。  
野口君と出会えました。

あちらはきき取ってないようですけども。

では、また明日。

15話・悪魔として・・・回想とついでの名の回想(3)前書き(のき)

本番前日。

15話です。

回想3回目ですな。

では15話とついで。



15話：悪夢そして・・・ 回想という名の妄想3

夢を見た。

野口君を見れたからだろうか。

過去の夢などいつ以来だろう。

疲れているのだろう。

それはそうだ、この1週間慣れない生活をしていたら誰でもこうなるだろう。

これは夢だ。

父が倒れた。

当然だろう。家の事は私がしている。

だが、今まで以上に仕事をこなしお母さんの事を必死で振り切ろうとしていたのだから。

「過労ですね。」

そうですね。良かったです。少し休めば大丈夫なのでしょう？

「ええ断定は出来ませんが、検査入院だと思えば良いでしょう。」

お父さん。仕事をしすぎです。少し休憩すると思つて下さい。

「ああ悪かった。お前にもかまってやれなかつたしな。」

ですね。たまには家に居てゆっくりお話ししましょう。

1週間たつてもお父さんは退院出来ませんでした。

「南、お父さんに何かあつたら親戚の叔父さんを頼りなさい。」

何かなどないのでしょうか。私達は二人の家族なのですよ？

目を逸らしていたのでしょうか。

分かりたくなかったのでしょうか。  
いえ、分かっていたのでしょうか。

「お父さんは後、3ヶ月も生きられないでしょう。」  
そう・・・なのですか？本当ですか？

「今の内に心の準備をしておいて下さい。」  
中学3年生の春の出来事でした。

「南、お父さんは卒業までは生きてはいないはずだ。お金に関しては叔父さんに渡してある。心配しなくていい。」  
そんな事はどうでもいいです。

お父さんがどうして死ななければいけないのですか？  
私を一人にするのですか？

「南、すまない。」

雨の降る日だった。

そういえば、お母さんの時も雨でしたね。

今日の朝、お父さんが死んでしまいました。

病院から抜け出して一人でこんな所まで来てしまいました。

野口君と昔遊んでいた広場ですね。

雨で濡れて気持ち悪いですね。

どうしてでしょうか。

心の準備はしていたはずですよ。

・・・何故なのでしょう。

何故・・・なんですか！

私には予知があるのでしよう！

小さい時からずっとずっと！私に関わる事なら夢で教えてくれたじやないですか！

引く気もなかったくじ。眩暈が突然起こって引いたら1等が当たることがわかった。

それは引くしかないと思った。

夢で遠足当日雨が降ることがわかった。傘2本とレインコート2着をもっていけばいい。

なぜ、なぜそんな小さなことしか教えてくれないのですか！

お父さんも、お母さんももっと早く分かっていたら救えました！

お母さんの時は私が一緒に車にのっていることが分かれば教えてくれたのですか！

お父さんの時はずっと私が一緒に居られれば教えてくれたのですか！

神様、何故なんですか！

音がした。

「南……？」

あ……え？野口君？なんでここに？

「え・・・予知？なんだそれ・・・。え？え？意味が分からない。南お前小さい時から準備万端だと思ってたけど・・・え？テストとかもか？俺との勝負とかもか・・・？」

違う。野口君。それは違う。そんな都合のいいものじゃ。野口君が離れていく。

「そんなのどうやって信じろっていうんだよ！」

野口君！

・・・足が速くなったね・・・野口君。

あはははは。ついに一人か。一人か。不幸の極みだ。

「南ちゃん。本当にいいのかい？うちに来て良いんだよ？」

いえ、この家にいたいと伝える。

もし駄目そうでしたらそちらへ向かいます。

けれども中学校を卒業するまではここにいたいのです。

未練だろうか。

秋も深まって来た。

「1週間に1度は様子を見にくるからね。その時に駄目そうだと判断したらすぐにうちに来るように。」  
「  
分かりました。」

今まで以上に勉強に勤しんだ。

家事をこなすようになった。

スポーツも前より出来るようになった。

・・・満足出来ないよ。

冬になった。

受験が終わった。

無事合格していたようだ。

誰も周りにいないようだね。

そつだろつね合格発表が終わつて1日たつている。

人もまばらだろつ。

野口君とはあれ以来1回も会つていない。

春になった。

高校生になる……か。実感が沸かないね。

卒業式の日。

皆が泣いている。

私は一人で校舎を歩いてた。

3年間のお礼を言いに先生の所へ顔を出しにいつてた。

家へ戻る。

春休みが終わつたら、私はここから車で30分離れた所へ行く。

残念だね。

せつかく近くの高校に受かつたというのに。

肩を叩かれた。

振り向いた。

頬を叩かれた。

痛いじゃないか。

今頃どうしたんだい？

野口君。

「殴れ南。」

どうしたんだい？と聞いたんだが？

「俺の事を殴れ南。」

ついにDMにでもなったのかい？

「ふざけるのは終わりだ。」

そうなのか。

ふざけているつもりはなかったのだがね。

遠慮なく。

いい音だ。

「いってえ！！お前本気で殴りやがったな！眩暈がすげーんだが！狙ったからね。」

女の子の頬をはたいておいてそれぐらいで済んだ事を喜んだほうがいいよ。

「南、悪かった。俺が悪かった。親父さんが亡くなって泣きたいのはお前のほうだったのに。」

もう1発殴ろうかい？人の心情を勝手に決め付けないでほしいな。

「悪い。なんて言ったらいいか分からなくてな。」

野口君。君は仲直りにきたのかい？

「ああ。南、お前は俺の一番のライバルで俺の幼馴染だ。」

そうかい。でも残念だね。

「なにがだ？」

私はこの春休みが終わったら遠くにいく。

「なんでだよ！お前・・・親戚の所か？」

ああ良く分かってるね。さすが幼馴染。

「行くな。」

君に引き止める権利があると思うのかい？今更だろう。

「行くなっていつてるだろ！」

抱きしめる権利もあるのかと言いたくなるね。もう高校生になるのだよ？私達は。

「行かないでくれ。」

泣く程かい・・・。

「一生の願いだ。」

君は一生の願いをそんな事で使っているのかい？

もう2度と願い事を言っても叶わないかもしれないよ？

「構わない。」

そうか。

電話を取り出す。

「そうかい。娘も楽しみにしていたんだがね。南ちゃんが残りたいたらしようがないか。今までと同じで1週間に1度ぐらいは顔を見に行くよ。」

「あれは南もわりーだろ！予知とか言ってるけど一人で喋ってるから嘘とおもえねーしなあ！」

うるさい。嘘ではないけどね。

「まあなんでもいいわ。お前テストとかには予知とか使えなかったんだろ？」

まあね。そんな便利なものならば授業などまともに受けないよ。

「ふーん・・・自分の身の回り限定ねえ。微妙だな。」

ああ微妙だ。何にも役に立たない能力だろ。

「まあ便利だとは思うけどな。雨が降ると分かってれば濡れる心配がなくなる。」

天気予報でもみればいいじゃないか。

「それがあつたな！」

うるさい。

桜が綺麗だね。

「ああ3月だからな。今年は早かったみたいだな。」

桜はいいね。甘そうで美味しそうだ。

「チョコにでも見えたか？」

それはないね。

「そういえば南、どこの高校にいくんだ？」

ここから一番近くの高校だね。

「・・・お前遠くへ行くって言ってなかったか？」

そうだね。

「なんでここが一番近くの高校なんだ？」

そうだね。なんでだろうね。

「詐欺だー！！！！俺の涙を返せ！どうなってやがる！！！！この

ペテン師野郎！」

野郎ではないね。

涙は地面と制服に吸われてしまったね。

舐めればいいんじゃないかな？

野口君、制服のボタンがないよ？

「え？あ、ああ第2ボタンはマネージャーに取られた。」

そうなのかい。人気者だね。

「第2ボタンなんてなんで欲しがらんだらうな。」

なんでだろうね。理由は良く分からないよ。

「南？欲しかったか？」

いらぬね。第2ボタンなんて。

「そうだよなー第2ボタンなんてもらってもしょうがないよな。」

そうだね。だから私は第1ボタンを貰おう。

「なんでだよ！」

野口君の1番のライバルであり、

野口君の1番の幼馴染。

野口君を1番に思っている。

これだけで十分だろう？

2番なんてまっぴらごめんだね。

私は1番しか興味はない。



「本気で取るなよ・・・制服が千切れるかと思ったぞ。」

野口君はどこ的高校へいくんだい？

「話変えやがった。まあいいか。」

で、どこへ行くんだい？

「初めてだな。」

なにがだい？

「よろしくな。同級生。」

そうかい。

よろしく。同級生。

私は、物心ついて初めて泣いた。

「こいつは椅子で寝たと思ったらいきなり魔されだして。」

「まあまあ疲れていたんですよ。勇者にあったり料理したりで。」

「ふん、今は落ち着いたようだな。」

「そうですね。嬉しそうな顔をしていますね。」

「いつも、こうだったらこの国の姫など相手にならんかもな。」

「そうかもしません。」

「涙を拭いてやれ。」

「はい、畏まりました。」

「・・・ミナミ、明日からが本番だぞ。」

15話・悪夢そして・・・ 回想という名の妄想3 (後書き)

15話を読んただきありがとうございます。  
毎日ユニークが増えていき嬉しい限りです。

本日は2本上げれる可能性は低いです。

では皆様、また明日。

16話：城へ。(前書き)

16話なんとかできました。

1日2話は出来るだけ頑張っていると思います。

## 16話：城へ。

・・・ん、なんだろう。体が痛い。  
ベットで寝ている割には体が痛いな。

・・・ん・・・昨日の記憶があまり無いな。

確か野口君を見た後、装飾店に戻ってアクセサリーを貰う。  
お昼ごはんは、お義父さんにサンドイッチを買って貰う。

その後家に戻って野口君の分のクッキーを作って・・・  
夕飯を食べて・・・

ああ椅子で寝てしまったのか。  
ベットまでマールさんが運んでくれたのだろう。

「起きて下さい。ミナミ様」

はい。起きてますマールさん。

「今日は夜から城へ行きます。覚えてますね？」

はい。覚えてますマールさん。

「朝食後にドレス合わせ、昼は家で主様とお茶でも飲んでください。  
わかりましたね？」

はい。分かりました。

「はい、では起きてください。」

はい、お休みなさい。

「起きる。」

はい。起きています。

眠いです。まだ体が慣れないですね。不思議な感じですよ。  
家のベットで寝ているのでは？と毎日起きるたびに思っていました。

「起きたかミナミ。」

はいお義父様。

「起きてるか？」

大丈夫です。確認しないでください。

「確認するくらいでないかと安心しなくてな。」

「どれだけ寝ぼすけですか私は。」

「自覚しろ。」

はい。すみません。

昨日はあまり見ていませんでしたが、綺麗な石ですね。

「黒銀石という。」

金色が混じっていますが？

「だから不純物いりだと言っている。」

安いんですね。

「だが銀よりも金のほうがお前には似合う。」

ありがとうございます。

「その耳の装飾品も高いものだろうか？加工技術は大したものだ。」

「一流の職人だろうな。それを作ったのは。」

いえ、多分3000円もしませんね。

「さんぜんえん？それはどれぐらいの価値だ？」

このパン30個分ぐらいです。

「なんとも・・・その技術があれば一生暮らせそうだがな。」

「そうでしょうね。この国は全部手作りばいですからね。」

「そうだな。その石にあった彫り物をするからな。石自体も高い。」

「主様冷める前に。」

「ああそうだな。ミナミ、グラスを取れ。」

はい。

「お前の前祝いだ。」

ありがとうございます。頑張ります。

ドレスは今までと同じものを？

「あのドレスは試しですね。ミナミ様に合うかどうかを試した品です。」

そうなのですか。あれでも良いと思いますが。

「これを見たら驚きますよ。」

前のドレスは真っ黒のドレスにフリルがついただけだったが。

金系のラインとフリルの増量。胸元が前より開いていませんか？

「そうですね。ミナミ様はもう少し女の魅力を出したほうがよろしいかと。」

そうですか。・・・少し恥ずかしいですね。

「その顔を勇者様の前でも出来るようにしたほうがよろしいですよ。」

無理だろうね。

「勿体無いですね。素材は良いのに中身が伴わないですね。」  
うるさい。

コルセット・・・ベルサイユの薔薇でしか見た時がないよ。

「これをつけてウエストを。閉めてつとそうすると胸が綺麗に見えるんですよ。それに大きく見えますからね。」

そうだったのか。パッドみたいなものか・・・。痛い・・・慣れるまでには時間が・・・いや一生慣れなさそうだ。

「良く似合っている。」

ありがとうございます。お義父様。

「ふむ・・・マール。花を何本か取って来い。」

「畏まりました。」

「これだな。黒のやつだ。肩から首にかけてと頭に一つ。」

「畏まりました。馬車に乗るまでに必ず。」

お義父様。・・・貴族ぽいですね。

「貴族だからな。」

そうでしたね。普段の態度を見ていると貴族ぽくないので忘れていました。

「お前は人間ぽくないがな。」

真似をしないでください。30歳のおじさんが”ぽく”とか使わないで下さい。

後、人間じゃないとはどういうことですか。

「子供だと言っているんだ。」

子供も人間ですよ。お義父様。

馬車がきた。

緊張しているのだろうか。

野口君。やっと会える。

これだけ綺麗に着飾ってみたよ。

似合っていないと笑われるかもしれないな。

・・・もし、似合っていると云ってくれたら嬉しいけども。

後数時間だ。

・・・よし。いきましよう。お義父様。

「早くしろ。ミナミ」

置いていかないで下さいよ・・・。

一応私が主役でしょう・・・。

運動会で一番頑張ってるのは父兄でした。とか言われちゃいますよ。

「娘の晴れ舞台だろう。打算はあるが俺も楽しみだ。」  
「そうですか。娘と言ってくれるんですね。」  
「娘は娘だろう。ミナミ・シュタイン。」  
はい。お義父様。



16話：城へ。（後書き）

見て頂きありがとうございます。

本当はもう少し描写を入れたかったのですが、時間があまり無かったのでこのぐらいで。もしかしたらこのページは大きく改訂する可能性があります。

けども流れは変わらないと思います。

最後の準備。城へ行くまで。これは絶対に変わらないです。

改訂があつたとしても内容は変わらないので安心してください。

もしかしたら伏線いれてくるかもしれませんが。

本当に次の投稿は明日となります。

野口君には明日確実に会えるでしょう。

では皆様よい祝日を。

私は4日の朝2時まで仕事です。

## 17話：心理戦。（前書き）

皆様見て頂きありがとうございます。

仕事から帰ってきて書き始めたら3時でした。

17話心理戦。どうぞ。

楽しんで読んで頂けたら幸いです。

追記：お気に入り登録、評価共にありがとうございます。  
皆様がお気に入り、評価をしてくれるからこそ文を書く気力が湧いてきます。

お気に入りをしてくださった5人の方。これからも長い目で読んで頂けると幸いです。

## 17話：心理戦。

門の中を通る。

石造りなのだね。

建築に関しては私はまったく素人だから何がすごいのか分からないな。

けど、これは素晴らしいものなのだろう。

日本のお城や神社には無いものがあるね。

そういえば、修学旅行には間に合うのだろうか。

野口君と初めての旅行だったのだが。

ああ・・・これが旅行みたいなものだったな。

戻ることが出来たのならばだが。

神様という名の旅行プランを考えた人。

・・・旅行だったらもう少し二人で居る時間を作ってもいいんじゃないかい？

どう見ても一人で行動している時間が多いのだが。

少しぐらい文句を言っても構わないだろう。

何故、一緒の場所から移動して、一緒の世界に来て、違う場所に出るんだい？

どう考えてもおかしいだろう。

中指か・・・中指だけだからこんなに離れたのか。

抱きつければ半日ぐらいで済んだのだろうか。

「なんて顔をしているんだお前は。」

可愛いでしょう。貴方の娘ですよ？

「世界全てに対して文句を言っているような顔だったぞ。」

すごい具体的ですね。

「まあいい。夜会に行ってもそんな顔をしていたらすぐにでも妾に  
してやるう。」

大丈夫です。

そういえば、今日はルックさんもマールさんも居ませんか？

二人は確実に連れていくと思っていたのですが？

馬車の運転をしているのは全く知らない人だ。

「あの二人は、先に行き夜会出席者にクッキーを配っている。護衛  
の連中にも確か配るといつていたな。」

それはそれは皆さん喜んでくれると嬉しいのですが。

「喜ぶだろうな。金の成る木をわざわざ配ってくれているのだから  
な。」

・・・着く前から憂鬱になりそうです。

「それはそうだろう。あいつらは絶対に作り方を言わない。これで  
意味は分かるな。勿論俺は作り方は知らん。」

良い笑顔ですね。パパ。

「何を言っている？なんだそのパパというのは。」

動揺した所は初めて見ましたね。

こういうのに弱いのですね。

目が少し左右に動きましたよ。

「・・・お前の洞察力には呆れるな。そのような事どこで習った。」

困窘というスポーツ・・・競技には動揺は許されないのでですよ。

動揺した瞬間に斬られます。

目の動き、

指の動き、

呼吸音、

勝負は盤上だけでは無いのですよ。

「イゴというのは知らないが、盤上で行うものか。戦争時、地図の  
上で行う軍事演習と似たようなものか？」

ええそうです。私個人で同年代には負けた時は、ほぼありません。

プロ・・・専門家には勝てませんでした。

「だろつな。何にでも専門家というのはいる。専門家がそう簡単に負けては困るだろう。お前もな。」

ええ。目標が無くなるという事ですからね。

「分かってはいるならいい。だが、一番上というのは辛い。上には何も無い。自分で築き上げて行くしかないのだから。」

ええ、私達はその築き上げたものを昇っているだけです。辛さは半分にも満たないでしょう。

「王は、勇者は、その一番上だ。その所を良く考えておけ。」  
はい。有難うございます。勉強になります。

野口君。君は今どれだけのプレッシャーを感じているんだい。

私は、分かってあげられるのだろうか。

・・・傲慢だね。分かってあげられる・・・か。分かるつと努力しよう。君の隣にいるために。

馬車を降りる。

「シユタイン様。お待ちしておりました。夜会参加者の方はシユタイン様が最後となります。」

「分かった。皆待っているだろう。行くぞミナミ。」

・・・何故最後に来たのですか？

「後で言う。」

そうですね。

で・・・何故最後に到着したのですか？目立ってしようがないと思います。

「当然だろう。」

何を言っているんですか？答えになっていませんよ。お義父様若くしてばけたのですか。

「何を言っている。下級貴族は上級貴族に顔を見せなければいけな

いからな。最初にこななければいけない。意味は分かるな。」  
お金ですね。・・・ああ分かりました。お義父様。そんなにすごい方でしたか。私の運もそこまで悪くないようですね。

「端的に言えばそうだな。ミナミ、俺はこの夜会参加者の中で王族を除いて一番偉く、一番金を持っている。そして今、一番王になる可能性が高い。」

・・・私を勇者に近づけようとする理由が分かりましたよ。

「ふん、今更か。お前にも理由があるのだろうか？」  
はい。譲れないですね。」

この国は世襲制ではないのですね。

「あんなものはただの害だ。王の子供というだけで王になる。

いや害だけではないな。無論今までも子供が王になったこともある。それはその子供に力があつたというだけだ。

力のあるものが王となる。それがこの国だ。」

・・・なるほど。では勇者は王になれるのですか？

「前例はない。姫と結婚したとしても王になれるかどうかは別物だ。」

その場合お姫様は？

「さあな。だが、お飾りとして残るのだろうか。いきなり姫という看板が無くなつては民から反発を受けてしまう。」

「だが・・・今回の勇者はどうだろうか。力はある。王族という金もある。かつ民の信頼も厚そうだな。だが何か不始末をしたら、すぐにその信頼は無くなるものだろう。実績が少なすぎる。」

・・・野口君がノーラ姫と結婚したら王様となる可能性は限りなく高いと。

そうなるとお義父様は王様になれないと。  
だから私を使うと。

お金に無頓着ではなかったのですね。

「当然だろう。金は無限にあるものではない。使うべき時に使い、使わない時に貯める。それが出来ずに国を守る事など出来るわけがない。」

私はお義父様に拾われて良かったようです。

「ミナミ、お前は動物か何かか？」

捨て犬、捨て猫ならず捨て人間ですね。庭にぽいとされていました。

「捨てられた人間か。捨てられていたのだったら俺が使おうと問題ないだろう。」

無いですね。

私には何の問題もありません。

「主様。皆喜んでいました。」

「そうか。良くやった。」

「いえ、ですが食べて頂くまでが大変でした。

毒でも入っているのではと疑われている目でしたね。

一人の貴族の方が召し上がってくださったので、そのまま皆様受け取って頂けました。」

そうでしたね。ここは貴族達が集まるのでしたね。命を狙われてもおかしくない程の重要人物が集まると。

「シユタイン様。お久しぶりでございます。」

「主様こちらの方です。」

「ああ・・・サイン・クラウドか。」

クラウドさんですか。これは大変そうです。あのクッキーが全て配られたとなると・・・家族で来ていたとしても・・・100以上も人の名前を覚えるのですか。この人一人ですら終わるまで覚えて

いられる自信がありませんね。

「俺の執事が助かったと言っていたぞ。よく怖がらず食べれたな。」

「いえいえ、面白そうでしたからね。シユタイン様が毒を盛る訳がない。それに加えて配っていた二人は側近中の側近と。確実に安全と判断したままでですよ。」

「ふん。目的は？」

「分かっているのでしょうか？」

「ミナミ、後で教えてやれ。」

私に話しを振るのですか。やめてください。

「これは・・・美しい方ですね。これ程綺麗な黒髪・・・いえ髪ではないですね。貴方自身が・・・。」

ありがとうございますクラウドさん。では、夜会が終わった後にでも。

「はい。楽しみにしております。・・・名前で呼んでも？」

いいですよ。

「ミナミ様。先ほどのくつきーとの件を無しにしても、二人で会えますか？」

何の話をするのでしょうか？

「大した話ではありません。私のプロポーズの時間を取らせて頂けないかと。」

そうですか。お断りします。

「ははは！即断即決とは！シユタイン様に良く似ていらっしゃる。」

さすが親子・・・といった所でしょうか？」

そうですね。お義父様と似ていると言われたのは初めてですが嬉しい限りです。

「また後で会いましょう。小さき黒姫。ミナミ様。貴女はノーラ姫にも負けない美しさをもっています。努々お忘れのないよう。」

ご忠告ありがとうございます。



・・・疲れました。お義父様。私はもう疲れました。

「勇者に会うのだから。」

分かっていますよ。

愚痴ぐらいは許して下さい。

「ふん。小さき黒姫か。ミニミお前は小さいからな。」

背のことですよね。

「さあな。」

100回殴りますよ。

17話：心理戦。（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

17話からは今までと少し雰囲気が変わってきてます。  
やはり野口君が近づいてきているからでしょっね。

18話は15時頃を予定しています。

## 18話：再会。（前書き）

18話投稿完了。

4時になってしまいましたね。

仕事が終わったのが2時半過ぎていたので申し訳ない。

お気に入りかいつの間にか6件になっていました。

6人の方。それに加えユニークユーザーの方達が右肩上がりが増えてきました。

これからも宜しく願っています。

では18話再会。どうぞ。

## 18話：再会。

「シユタイン様お待ちしておりました。皆様揃っております。こちらの方はミナミ・シユタイン様でよろしかったですか？」

頷く。お義父様は何も喋りませんね。

「くつきーと言いましたか？私も1袋もらいました。ありがとうございます。ございます。後で食べさせて頂きます。」  
「いえいえ。」

鎧を着けたおじさんがくつきーと言っていますね。何かシユールです。違和感がたつぷりです。

「シユタイン様、シユタイン様息女ミナミ様。入られます！」

・・・大きい部屋ですね。体育館並ですね。あ、美味しそう。甘そうなのもあるじゃないですか。

ああ・・・砂糖は調味料と言っていましたね。デザートが無いとは言つてなかつたです。

外で持ち歩けるような甘味が無いだけでしたか。料理人の人達ごめんなさい。美味しそうです。

「ミナミ。度胸があるのはいいが前を見る。」

はい。美味しそうですね。つい。

こちらを皆さん見えていますね。

お義父様についていけばいいのですかね。

一際綺麗な椅子の横にある椅子に座りましたね。

あれが王様の椅子ですか。高そうですね。

皇王とはどんな方なのでしょう。

イメージは結構白ひげの生えたお爺さんのイメージなのですが。

あれ？私の椅子はないのでしょうか。

「横に立て。」

そうでしたか。皆さん立っていますしね。偉い人だけなのでしょう。

「皇王イスターナ様。入られます！」

王様が来ましたか。

・・・でっかい。筋骨隆々という言葉がぴったりきますね。野口君より大きいのでは。

歳はどれくらいでしょう・・・50代・・・いやこれはもしかして。

「シユタイン久しぶりだな。よく来てくれた。」

「お久しぶりですイスターナ様。お呼び頂きありがとうございます。私の娘のミナミです。挨拶をしろ。」

お初お目にかかります。ミナミ・シユタインと申します。ドレスの裾を持って挨拶挨拶と。

「ほお・・・黒髪、黒いドレス、黒の装飾。漆黒か勇者と一緒にだな。その石も華も悪くない。良い趣味をしているな。」

「ありがとうございます。褒めて頂いたぞ。ミナミ。良かったな。」  
ええ。ありがとうございます。褒めて頂いた経験などあまり無いので嬉しいばかりです。服ばかりなのが残念ですが。

「ふっあっはっはっ！シユタインお前の娘は面白いな。顔を褒めると直接言つて来た奴は初めてみたぞ。勿論良い女じゃないか。ワシが後50年は若ければ娶つてやったのだがな。」

ありがとうございます。

やっぱりか。70歳前後と。見た目以上に歳をとっていると思ったが70歳を超えているとは思わなかった。

「いえいえ。そこまで褒めなくて結構です。調子に乗りますから。家に帰ってからが大変になりそうだ。」

うるさいですよ。

「シユタイン、お前の娘は誰かに嫁がせるのか？伸びてきている貴族も何人もいる。クラウド家もその一つだろう？」

「まだ娘は若いので任せておくことにします。私自身も若いですが好きな奴を選ばせてやりますよ。」

「そうだな。それも良いだろう。だが、若いことに手を抜いていたら行き遅れる可能性もある。シユタイン、お前もな。」

「ええ、分かっております。」

大丈夫です。行き遅れたら野口君に貰ってもらいます。

「勇者カツヤ・ノグチ様入られます！」

・・・来たね。楽しみだよ。君が・・・

笑っては駄目だ。笑っては駄目だ。笑っては駄目だ。頬が・・・痛い。

なんだあの格好は。幼稚園の学芸会みたいだな。

マントにブーツ。それにサークレットに、・・・ん？首にチェーンが掛っていない？おかしいな。あれは肌身離さず付けていてくれた筈だが。

こちらに来る時、もしかして鞆の中にも・・・あり得ないな。

野口君はずっと着けていてくれた筈だ。確かテストの時にも・・・着けていたな。

どういう事だろう？

それとも首に掛けないで部屋にでも置いてきたのか。

壊す可能性もあるからな。

ここでは直せるかどうか分からないしな。

「初めまして。シユタイン様。それと・・・」

ああ。王様達の手前初めて会った事にしたいのか。

ミナミです。ミナミ・シユタインです。初めまして。

「ああ。シユタイン様の娘様でしたか、ミナミ様初めまして。」

野口君も演技が上手いな。

帰ったら文化祭で生徒会主催の演劇でもやってみるのも良いんじゃないかな。

けども60点だね。顔が赤いよ。恥ずかしかつていては演技は出来ないね。

「カツヤ。ノーラはどうした？」

「少し予定があるそうです。皆様で先に初めて居てくださいのとです。」

「そうか。・・・皆、ノーラは少々着替えに手間取っているみたいでな。先に初めていてくれとのことだ！グラスを持って！」

「ミナミ様。後で話があります。時間が空きましたらテラスのほうへ来て下さい。」

ええ、分かりました。

野口君の頼みならいつでも行くんじゃないか。

積もる話もあるだろうからね。ゆっくり時間を取れるように貴族のほうを終わらせてから行くでしょうか。

「ミナミ。本当にお前は勇者と知り合いだったのだな。」

ええ、だから言ったでしょう？

「勇者はお前に惚れているみたいだな。あのように赤い顔。貰ったも同然か。」

野口君。お義父様にもばれていますよ。60点から50点に点数ダウンです。フッフ

ええ、勿論です。ノーラ姫も1度見てみたかったです。

「後で会えるだろう。勇者が来てからそろそろ1月たつ。ノーラ姫ともかなり仲が良くなっているのだろうからね。お前も早く恋仲に

なつてしまえ。」

ええ、任せて下さい。

野口君、フフフフ。

早くゆっくりと話がしたいよ。

っとその前に・・・クッキーの件と・・・この視線の量をなんとかしなければ。

・・・そんなに黒髪が珍しいのだろうか。

珍しいのだろうね。

今ならどんな質問にも答えてあげようじゃないか。

気分が良すぎるね。

ああ・・・スリーサイズだけは言わないけどね。絶対にね！

特に胸を見ていた。その人とは話もしたくないね。

女は胸じゃないのだよ胸じゃ・・・。



18話：再会。（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

18話再会終わりました。

19話目は明日投稿となります。

では皆様明日またお会いしましょう。

追記：数時間話数を間違えていた。

次の話を考えていてきずいた…

誰かつつこんでくれ！

寝ぼけていると駄目ですね。

19話・思い出と共に。(前書き)

19話です。

見て頂きありがとうございます。

## 19話：思い出と共に。

挨拶をする。

自己紹介をする。

挨拶をする。

自己紹介をする。

何度繰り返しただろう。

「お前の顔見せみたいなものだ。それに加えて金になりそうなものをもつていそうとなったら笑顔で近づいてくるだろう。」

お義父様。どこにいつていたのですか？

「飯を食っていた。」

ずるいです。私の分はどこへ。

「部屋に置いてある。ここで食べるのはやめておけ。」

何故ですか？

「察しろ。お前の食い方は下品すぎる。」

・・・フォークとナイフなんてほとんど使いませんよ・・・。

箸とは言わないですから。2本の棒を下さい。

「慣れる。」

慣れたくないですね・・・日本人としては。

落ち着いてきましたね。・・・お義父様。

頷いていますね。

・・・いつてきます。

風が気持ちいいです。人の熱気が籠っていると実感しますよ。

貴族の人達はどれだけこのパーティに熱意を込めているのでしょうか

ね。

・・・お金の為。家族の為。そして民の為。でしょうね。それは死に物狂いにもなるのでしよう。

王様になれる可能性を上げなければならぬのですからね。

あ、雨が降ってきましたね。

微妙にこのテラス屋根が足りていませんよ。

足元が濡れてきています。

「ミナミ様。お疲れ様です。」

ああ、野口君。会いたかったよ。

「ええ、私もです。」

ふふ、もういいんだよ？

「何がですか？」

ん？演技だよ演技。さっきは笑ってしまいそうになって困ったよ。真っ赤になってしまつて。

演技するならばもう少し本気でやらないとな。

役に入りきらないと駄目だよ？

「ミナミ様？演技？・・・まあいいです。それで話なのですが。・・・なんだい？」

「ノーラ・イスターナ姫様が入られます！」

大きな声だね。お姫様が来たようだね。

ん？野口君？なんで壁にもたれてるんだい？

水が押し寄せてきた。気がしたただけのようだ

・・・私の周りはまったく濡れていない。

なんだろう？

今のはなんだったのだろうか？

眩暈かと思っただけでも頭痛はしていないようだね。

ん？広間のほうの音が無くなった？  
どうしたんだろう？

お姫様が来たからかな？

眩暈がした。

「思い出の品というわけですか。」

「運がいいですね。」

「無理やりでもいいのですよ？」

気持ち悪いな・・・なんだ今のは。  
つと野口君？野口君！起きないね。なんでまた・・・？

「お久しぶりです。南さん？」  
後から声がしたね。

聞いた事がある声だけでも。  
振り向かないほうが良いと思うだが・・・振り向かないと駄目なの  
でしょう？。

「始めまして。ノーラ・イスターナと申します。」  
先程久しぶりと言っていたよ？

「そうですね。お久しぶりです。1ヶ月ぶりですね。」  
ふう・・・やっぱりそうなんだね？

絢子さん？  
どうしたんだい？

金髪になんて染めて髪が伸びてしまって。

エクステかい？

「落ち着いていますね。貴女はやっぱり貴女らしいと。」

落ち着いてるように見せているだけだよ。

聞きたいことは沢山ある。

「答える気はありませんよ？」

そうだろうね。

一つだけ聞かせてくれ。

野口君は大丈夫なのかい？

「ええ、大丈夫ですよ体に異常はありません。」

そうか。

記憶を消したのか私の事を忘れさせたのかは分からないが、それも  
絢子さん君の仕業かい？

「さあ？どうでしょう？」

答えているのと同義だよ。

そのような笑顔で答えている時点だね。

「外へ行きませんか？」

雨が降っているのだが？

後、外に出れるのかい？

一応絢子さんはお姫様なのだろう？

「ええ全員寝ていますよ。貴方のお義父様。シュタイン様もね。」

お義父様。大事な時に役に立ちませんね。

・・・雨か・・・私は雨女なのかな？

嫌な時はいつも雨な気がするよ。

「南さん。日本に帰って下さい。」

何故だい？

「貴女が厄災の可能性があります。  
ここに居られると困りますね。」

災害を起こすのなら、この国には居ないでください。  
では、野口君の記憶を戻してもらおうか？  
後、野口君も一緒に帰らせてもらおう。

「無理な相談ですな。」

ああ、平行線だね。

・・・暑い・・・

水蒸気ですごい事になっているね。霧のようだ。  
火の弾を出したと思ったら水の壁とは。

やっぱりさっきの水のようなものは絢子さんか。

蒸気が消えないね。水を使う?となると・・・この蒸気も操れる?

「ふふつ。ねえ南さん?水蒸気爆発って言葉はご存知?」

舌打ちしたくなるね。

どこから私が火を出すと・・・ああ1回だけ使ってしまったな。あの村か。

私がいると分かっていたのだね。

それに加えて、応用が出来るのはあちらと・・・。

冷静に考えれば考える程、私が不利だね。

・・・女の子は殴りたくはないがね。きちんと入れば・・・。

・・・空を飛んでる?

え?

なに？

痛い。

・・・すごい痛い。

地面に着いた？

体が動かない。

なに？今のは？

・・・え？

野口君が見えた？

雨の中走ってきている？

どうして？

「ノーラ！どうした！？ドレスが燃えているじゃないか！」

野口君？

どうして？

「ええ・・・ちょっとした事ですよ。」

何故・・・？

私が見えないの？

なんで？

どうして？

どうして私を見てくれないのです！

「泥棒猫さんが来たので追い払っただけです。」

・・・血は出ていないね

・・・記憶を無くす

・・・水を使う

・・・全てを水に流すとても言うのか？。

・・・思い出も記憶も

・・・そして私の姿も隠す事が出来ると。



・・・なんだその便利な力は・・・。

野口君も

お義父様も

マールさんも

ルックさんも

私のことは覚えていないのか。

そうか。

そうなのか。

私はここまで来て、

・・・また一人になってしまったのか。

・・・私が生きてきた18年はなんだったんだろうな・・・。

・・・野口君と出会って10年以上・・・。

今まで一度も君を恨むということはなかったよ・・・どんなことがあると。

だが・・・野口君。

君は嘘つきだよ・・・。

そこから先、私は意識を放棄した。

19話：思い出と共に。（後書き）

19話読んで頂きありがとうございます。  
書いていてうーんとなる話でした。

読者の皆さんが納得して頂ければ嬉しいです。

次は20話。大体の人はそろそろ20話の題名は想像がついてきそ  
うですね。

では、第20話でお会いしましょう。

## 20話・回想という名の妄想4（前書き）

第20話お待たせいたしました。

待っている方がどれぐらいいるかは分かりませんが。

そういえば、先日目標を1日100ユニークといたしましたが・・・

昨日のユニークユーザーが98人！後2人！

これが3桁の壁というやつでしょう。

けれども近づいているのは確かですね。

頑張っていきます。

## 20話・回想という名の妄想4

絢子さんと初めて会ったのは何時だったか。

小学校6年生の時だったか。

野口君の家の近くに引っ越してきた家があった。  
豪華な家だった。

「なあなあ南。この家すげーよな。」

そうだね野口君。

「ウルトラでつけー犬がいるんだぜ？」

本当に君はウルトラが好きだね。

「ウルトラってなんかかつこよくね？超より上って感じがしてさ。」

・・・どうだろうね・・・そのセンスは少し直してほしいかもね。

「南にはこのかつこよさはわかんねーだろうな！」

3分間で星に帰ってしまうのだろうね。

「3分で敵を倒すんだぜ？最強じゃねーか。」

そうかもしれないね。私だったら3分あったらお湯をそそいでるね。

「らーめんにか？」

そうだね。

「なんかお腹すいたな。」

そうだね。

「おやつ食べにいくかー！今日は俺の家こいよー！」

うん。行こう。

「なあなあ南。」

なんんだい野口君？

「俺のクラスになすげー可愛い子がきたんだよ！」  
「そうなのかい？」

「俺の席の隣にいるんだけどもすげー可愛いんだよ。なんつーか人形みたいっていうのか？」

それは微妙な褒め言葉な気がするよ野口君。

「あー・・・目が大きくて・・・」

力持ち。

「細くて・・・」

力持ち

「力持ちとか付け足すな！可愛くなくなるだろ！」

私より可愛いのかい？

「・・・う、あつ俺宿題やんねーと！」

野口君？私より

「やべやべー！ウルトラいっぺーあるんだ！」

じゃあ、私が教えてあげよう。

一緒にいこう。

「・・・」

喋れ。

中学生になった。

野口君？その人は？

「ああ、陸上部のマナージャーだよ。俺、今日足やっちまってな。」

大丈夫かい？

「大丈夫大丈夫。ただの捻挫だからな。2・3日すれば治る治る。」

そうかい良かったよ。

「野口君？その人は？」

「俺の幼馴染の久坂南。南って呼んでやってくれ。」

人の事を勝手に名前で呼ばそうとするんじゃない。

「久坂さん？でいい？」

ああ南でいいよ。

「いいんじゃないか！」

君の名前は？

「小林、小林絢子。」

小林さんか。うん良い名前だね。

「私も絢子でいいよ？」

そうかい？絢子さんと呼ぼう。

「うん。南ちゃん。野口君の家までいくから手伝って。幼馴染なんですよ？」

ああ、そうだね。野口君は大きくなったからね。一人だと大変だっただろう？

「そうだね。重い。肩貸してあげていたんだけど。重い。」

「だから一人で良いつて言っただろ？」

「だって家近いし。」

どこなのだい？

「あー南。この子だよ。あの引越して来た家の子。大きな犬がいる。」

ああ。あそこの。つと野口君右腕を上げて私の肩に回してくれ。

・・・両手に花だね。野口君。

「ぶっ！何言っつてんだ南！」

どうして周りをキョロキョロと見ているんだい？

「同じ学校のやつらがいないかと。」

良いじゃないか。見せ付けてあげよう。野口君は二股をしているんだと。

「南ー！お前俺が彼女出来なくてもいいってのか！」

絶対に手に入らないものを欲しがってもしようがないよ野口君。

「絶対とかいうな！」

「仲良いんだね。二人とも。小さな時から仲いいの？」

どうだろうね？

昔はライバルだったしね。フッフ。

「南・・・その歴史はもうやめようぜ・・・」  
黒歴史というやつだね。

私は一生覚えておくよ。

野口君は可愛かったなあ・・・

「遠い目をするな！」

野口君。手が胸にあたったよ？触りたいのかい？

「あたってねーよ！当たるほどねーよ！」

死にたいのかい？

「なんだよその選択肢！理不尽だ！」

「本当に二人とも仲いいんだねー。」

高校生になった。

「南ちゃん！一緒の高校だったんだね！」

絢子さん。久しぶりだね。すごい綺麗になったんだね。

「またまたー。何を言いますかー南ちゃんは！南ちゃんもすごい女の子ぽくなったね。その髪。受験の時大変だったでしょう？髪長いと不利とか言われてるし。」

長いと不利なんじゃないよ。長くても綺麗に手入れされていて、髪を染めていなくて髪を纏めてあれば十分有利になるよ。

「え。そうなの？」

そうだね。

「えー！私受験のためにはっさり切ったのに！」  
大学受験のときは安心だね。

「先は長いよ・・・南ちゃん。」

3年なんてあつという間だよ。

「・・・南ちゃん？イヤリングなんて学校にしてきちや駄目だよ？」  
髪で隠れるから大丈夫だろう？

「いや！駄目でしょ！先生に没収されちゃうよ？」

野口君から貰ったからね。  
ずっと付けていたんだ。  
「…………え？」

「南ちゃん……私、野口君に告白する。」  
「なんで、私に言うんだい？」  
「…………うん。なんていうか……自己満足？」  
「そうかい。」

「…………」

野口君。今日はすごい静かだね。

「南。俺、絢子に告白された。」  
「良かったじゃないか。」

絢子さんは可愛いからね。

「断ったんだ。」

「そうかい。」

君が選んだのだったらそれで良いよ。

「何も聞かないんだな。」

幼馴染だからね。

「そうか。そうだったな。」

「そうだよ。」

「南さん。最近遅刻多いよ。」  
「すまない。」

最近囲碁が楽しくてね。



絢子さん、出来るだけ少なくするよ。

「そう。少なくしてね？」

努力するよ。

・・・どこですれたのだろうかね。

まさか世界が変わってまで3人で行動する時がくるなんて・・・

・・・不便だね。

人間ってというのは不便だね。

欲求の趣くままに、行動出来ないのだから。

## 20話・回想という名の妄想4（後書き）

さて、第20話いかがだったでしょうか。

ファンタジー要素が段々無くなって来ていませんか……。とか言われそうで怖いです。

元々あんまないです。

では、第21話まで皆様お元気で。

良い土曜日をお過ごし下さい。

21話・決意と共に。(前書き)

皆様。見て頂きありがとうございます。  
では21話どうぞ。

## 21話：決意と共に。

・・・時計の音がする。

なんでだろうね・・・匂いが・・・消毒液の匂いか。

ここは・・・？病室？

「ん？ああ起きたの？久坂さん。」

・・・先生？

保健室？

・・・ああ夢だったのか。そうだね、あんな馬鹿げたもの現実には有り得ない。

起きよう。

今日も野口君と一緒に帰ろう。

絢子さんとも、・・・一緒に帰ろう。

もう・・・幼馴染は終わりにしよう。野口君。

あんな夢は見たくは無い。

「ああ・・・久坂さん。聞きたい事があります。寝たままでいいから答えて。」

なんですか？

「その・・・ドレスは一体なに？」

起き上がる。

立ちくらみがある。

倒れそうだ。

お腹が痛い。

ああ・・・そうか夢ではなかったのだね。

そうか・・・。

私は一人になってしまったのだね。

「久坂さん、私の言っていることが分かる？」  
ええ、大丈夫です。

「一から説明するわね。」

「ああ、それはワシから説明する。」

誰ですかその子供は。  
殴られた。

結構痛いですね。

「ワシは、時使いじゃ。」

先生、痛い子供がいますよ。

「もう1度殴られたいようじゃな。」

いえ、結構です。

「ふん、話を聞け。」

ちよつと待つて下さい。

先生。先生は話を聞いていますか？

「いえ、何も。確か見た先生の話だと、授業中に野口君が光り出して、貴女が走つて野口君に近づいていつて、一緒に消えたと聞いたわ。」

その後、クラス全体が騒然となったのを先生が抑えて、全員いるかどうか確かめたら小林さんが居なかったと聞いたわ。

その4日後、貴女が突然床に倒れていた。そのドレスの姿でね。それだけよ。」

落ち着いていますね。

「動揺しているわよ。けれどもあまりに不思議な出来事すぎて、理解出来ていないというだけ。」

そうですか。今は何時ですか？

「今は11時よ。お陰で今日は3年生は全員途中早退よ。勉強にならないって言つて。」

すみません。

この大事な時期に騒動をかけてしまいました。

「で、倒れてた貴女の傍に居たのがこの子。名前はなんだっけ？」  
「クラウス。それだけで十分じゃ。家名はとづくに捨てた。」  
「そうそう。クラウス君が貴女の傍にいて、貴女を誰にも触らせないと云って近づいてきた先生を投げ飛ばして黙らせたい？」  
それは・・・その時の担当の先生に悪い事をしましたね・・・後で謝らないと。  
で、クラウスさん。  
「いいのじゃな？この先生とやらにも聞かせても？」  
ええ。  
多分私だけで説明しても納得もしてもらえませんか。  
「・・・そんな事はないと思うけどね。」  
・・・無理だと思いますよ。

「という訳でコイツはノーラ姫に飛ばされて戻ってきたというわけじゃ。」

「・・・これは信じてあげられないわ。」  
でしょう。

違う世界に行つて野口君は勇者。絢子さんはお姫様。

そんな事を信じてくれるのだったら、それは脳外科にでも行つたほうがいいと思います。

「本当なの？」

ええ。嘘は一切ありません。

もし精神科へ行けというなら行きますが、この話が終わった後でもいいでしょう？

「そんな事は言わないわ。けれども・・・信じれる事ではないわね。」

「で、黒姫。お前は戻りたいか？」

黒姫とはなんでしょう？

「お前のことじゃ。夜会の最初のほうで言われていたろう？それが

しつくりきたのじゃ。」

そうですか・・・。

・・・戻れるんですか？

「1度だけじゃ。」

その1度には、こちらの世界へは帰してくれる事を含んでいますか？

「行きだけじゃ。」

何故？何度も出来るのでは？

「甘えじゃろう？それは？自分でなんとかせい。」

ワシはお前が気にいった。それだけの理由しかないのじゃ。」

・・・貴方以外に行き来出来る人は？

「あの姫だけじゃろうな。」

それもあの姫もあちらの世界でもう人の移動は使えないじゃろう。

自分の移動は可能じゃろうが人を移動させるのは、ある程度の代価がいるのじゃ。」

・・・代価？魔力というのですか？

「命じゃよ。」

「次使うとあの姫は20代で死ぬじゃろうな。」

・・・重いですね。だから貴方は無限に移動出来るのですね。”時  
使い”。

「そうじゃな。」

ワシは永遠に歳を取らん。

気紛れでお前に楽しみを見出しているだけじゃ。」

クラウドさん・・・？

あの姫の水は移動させる力があるという事ですか？

「歴代の姫となったものは、こちらの世界へ来る事が出来るのじゃ。  
儀式により覚える・・・じゃったかのう？」

世代に一人だけしかその儀式は使えんのじゃ。

水は関係ありません。

代価は膨大じゃがな。

あの姫は最初の移動でお主とあの勇者を移動させ20年近く寿命を

失ったのじゃ。もう1度お主を移動させ、全部で30年じゃ。膨大じゃろう?」

そう・・・ですね。

それでもあの国を守らなければいけないのですね。

「そうじゃ。王族というのはそういうものなのじゃ。」

・・・こちらとの時間差は?1日辺りが9日程度と見ていいんですか?

「そうじゃのう。それぐらいじゃな。」

けれども、私はあちらの世界に1週間ぐらいしか経っていません。

「あの姫の妨害じゃろう?異次元の狭間でお主を殺そうとしていたようじゃな。」

そこで殺せれば減る寿命は10年で済むのじゃから当然じゃろう。

けれども殺す事は・・・出来なかつたようじゃな。

甘さか。それとも理由があつたのかは分からん。」

だから・・・1ヶ月と言っていたのだね絢子さん・・・あれも結構動揺したよ。

水の魔法とやらは?

「マホウとやらではなく。術じゃ。」

媒体があればどんな人間にも使えるものじゃ。

媒体自体が本体であり、人のほうは想像力を必要とし身体的な疲れが出るだけじゃな。

ワシはこれじゃ。」

本ですか。なんでもいいんですか?

「思いを込め使い続けているものだけじゃ。」

使い続ける事により媒体となり得るのじゃな。

じゃが人間というのは使い続けるというのは無理な生き物じゃ。

よほど大事なものでなければ思いを込め大事に使い続けるということはないじゃろう?」



そう……ですね。

「……久坂さん？良い？」

なんですか？先生。

「野口君は記憶を無くして、貴女を大事にしてくれた人も、もう記憶がないのよね。」

そうですね。

「……本音を言うわね。行く必要がないじゃない。

先生としてなら、私を連れて行って、野口君を連れて帰ってくるとか言えるわ。

けど、私一人としては……言い方は悪いかもしれないけど、見捨てるべきじゃない……かしら？

久坂さんはもう戻ってこれない。野口君は戻ってこれるか分からない。い。

貴女の親御さんも心配するでしょう？

責任は全て小林さんにあるというのだったら、貴女が何かを背負う必要は無いはずだわ。」

先生、黙ってください。

もう1度言っただなら怒りますよ。

「何度だって言うわ。貴女は行く必要が無い。生徒を危険な目にあわせ……。」

うるさい。

それと先生、私の親はもういません。

心配する親もいません。

「……ごめんなさいね。けれど……久坂さんを心配する人はいるでしょう。」

……居ないと言いたいですけれど。

それはただの子供でしょうね。

クラスメイトの友人。親戚。いっぱい居るでしょうね。

「そうでしょう？だったら……良いんじゃない？」

そんな世界へ行かなくても。久坂さんの人生をかけてでもすることじゃないでしょう?」

ええ。人生をかけてすることではないのです。

これはただの旅行です。

行って帰って。また野口君と一緒に過ごす為の旅行です。

「戻ってこれなくても?」

ええ。旅行です。

一足早い卒業旅行です。

「今日・・・1日考えて。熱くなっているだけかもしれないわよ。」

それは命令ですか?

「いいえ、違うわ。大人からの助言よ。」

熱くなつて困つた事でもあつたのですか?

「社会人になつたら分かるわよ。みんなが通る道よ。」

・・・分かりました。

助言には従います。

「いいかろう?ワシが1日待つてやる事になつて居るのじゃが?」

「待つて頂けませんか?久坂さんにも時間が必要でしょう?」

「ふん。即断即決がお前さんではなかつたかろう?黒姫?」

そうですね。

・・・1日だけ待つて頂けませんか?

先生の大人の助言の時間を使ってしなければいけない事が出来ました。

「今日1日だけじゃ。この時計が1週回つた時にここに来い。」  
分かりました。

ドレスで歩いていると・・・人の目が大変だね・・・。  
着替えたいのだが・・・時間がないね。

「おい、久坂!話がある!」

先生方、保健の先生に全ての事情は話しました。

校門を出る。

「久坂。車を出してやろう。その姿じゃ動きづらいだろう?」

ああ先生。科学の授業はいいのですか?

「今日の授業は全部自習にした。」

いいのですか?

「久坂。お前は私の教員生活40年の中で一番の問題児だったよ。」

そうでしたか。

そうですね。

多分そうなのでしょう。

「ああ学校に遅刻はする。」

その割に授業は真面目に受ける。

テストの点数も悪くはない。

普段の態度はおかしいがな。」

そうですね。最後のは否定しておきます。

「お前に何があったかはきかん。後で聞けるのだろうか?」

そうですね。

「もう1度消えるのか?」

そういえば先生の授業中でしたね。

「ああ、びつくりしたぞ。」

お前があんなに必死になる所を見たのは初めてだったな。

囲碁をしている時のお前は集中をしているが余裕があったからな。」

そんな風に見えていたのですね。

余裕はあまり無かったのですがね。

「どうだろうな。1年間でお前に負けた時は驚愕だったが。今回は

それ以上にびつくりした。」

そうですね。

「ああ話がずれたな。」

そうでしたね。

「ずらしたんだろっ?」

よく分かりますね。

「3年間も生徒といるとな。大体こいつが何を考えてるとか分かるもんなんだよ。」

凄いですね。

先生というのはそれぐらいじゃないと勤まらないのでしょうかね。

「40年もやっていればな。」

消えます。

「そうか。残念だな。お前なら卒業後もやっていけばプロになれたかもしれないのにな。」

無理でしょう。

「可能性はあった。というだけだ。それよりも大事なことなんだろっ?」

ええ。

「学校よりもか?」

ええ。

「友達よりもか?」

ええ。

「親御さんは・・・いや、すまない。」

いえ、気にしないで下さい。

「そうか。車を出してくる。」

有難うございます。

先生。

21話：決意と共に。（後書き）

読んで頂き有難うございます。

21話終了です。

現代編ですね。

新キャラですね。

本日は1話投稿です。

今日は忙しそうなので2話目を作る時間がとれなさそうですね。

では皆様。また明日会いましょう。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9645x/>

---

野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

2011年11月6日05時25分発行